

上の事績人物才徳の以て道德的標本として教化の具たらしむべき者は、今日の英雄崇拜には認められずといふも不可なきを見る。

今日は村々町々に氏神なきの地なく、其社殿の營繕、祭祀神職の奉養に費す所少なからざるべく、天神、權現の類にして四方の崇拜を受くる者亦少々にあらず、信者の之に賽し之を祀る爲めに費す所莫大なる者あらん。而して此等は單に町村の鎮守集會所として、平時は兒守頑童の遊戯所たる外何等の効力なく、又咒力崇拜の英雄神は人の自立の志を害し、咒力神靈の迷信害用をなさしむる者多しとすれば、此の如き英雄崇拜は人心教化の大職務に益なくして、國民に徒費をなさしむる者といふも可ならん。此等英雄崇拜にして教化の實力たる素質なき者ならば止まん、然れども英雄崇拜は元國民性情の反映、理想の投射にして、且又人心が俊傑を敬し、性格人格の優秀なる者を欣慕する眞摯掬すべき人情に出て、若し之れを利導して教化の要具となさば、國民の倫理教化上利益尠小ならざる者あらん。之を棄て、顧みざるは、社會道德

上の一缺點、倫理の發達を冀ふ者の責免るべからず。

一般俗人が自己には如何なる關係あるやを知らざる鎮守氏神に對して、何等の思想をも抱かず、之に反して禍福左右の咒力ありと傳へられ、其歴史には不思議の奇蹟ありしと聞く咒力的英雄神に祈願するは、自然の勢のみ。而も此の如き咒力的英雄崇拜の中にも、眞摯なる英俊欣慕の種子存すればこそ、其崇拜を歴史的人物に求むるなれ、是れ咒力的英雄祈願も、之を利導啓發すれば眞摯なる英雄人格の道德的尊崇たらしめ、此に依りて倫理修養の一助たらしむべき萌芽にあらずや。人にして偉人俊傑の事業功蹟を歎美すると共に、其の人物性格を欣慕し、其に近似せんとする情なからしめば、何れの英雄崇拜も起る能はざるべく、假令咒力の方面よりせる私利的英雄崇拜なりとも、既に此の如き崇拜が存在せるは、即人情自然の發露にして、其咒力を利用せんとする衝動的慾求は、其性格人物を渴仰するの情に結合すればこそ、其咒力の存在を歴史的偉人に求めんとするなれ。されば土地の開拓者、氏の祖神の

如きは其功勞に依りて紀念せらるゝのみならず、崇拜は常に其性格を道徳的に理想化し、祖神は又道徳的標本となれる者なれば、此は彼の呪力的英雄崇拜よりも一層純朴に俊傑欣慕の人情を代表せる者といふべし。八幡太郎が如何に源氏武將の摸範として、八幡大菩薩に并て源氏の氏神たる勢力を有し、東照宮が徳川三百年の治績に如何に、明主神君として治者政治家の人物を養成し、其他諸藩の藩祖が各其子孫藩士の標幟たりしかを考ふれば、氏神の崇拜なる者は、其利導啓發の方法如何に依りては、如何に教化の要具となり得るかを示して餘あり。

今日町村に星羅せる鎮守、産土神、氏神の祭祀は、社會教化の上に効益なきは、先覺の之を指導啓發せざるに因る。若し氏神鎮守の事蹟功勞を明にし、其が土地の開拓者たり、又は古は地方一團をなせし氏族の祖神たる性格人物を明にし、之を教化に適用せば、人情自然の英雄崇拜及其に密着せる祖先崇拜を以て、人格修養の一勢力となすを得ん。若し又此の如き祖神たらざる者にして、氏神と稱せられ、功勞者にあらずして

鎮守たる者あらば、其が果して淫祠として起りし者にあらざるや、現在の信仰の如何なるやを調査して、之が矯正を謀らざるべからず。

呪力的英雄崇拜に至りては、其弊害の矯正困難なるだけ、其れだけ勢力の及ぶ所も大なる者なれば、社會的教化、倫理的修養の爲に力を盡して、其崇拜を清淨にし、祈願の性質を刷新するを勉めざるべからず。例せば、天神として崇拜せらるる菅公の如き、人物として又其經歷境遇も優に人の同情を惹き、英雄欣慕の對象として人間の一方面に於て理想的摸範たる勢力を及ぼし得べきも、而も菅公の事は僅に小學讀本の一隅に其の事蹟を叙するのみにして、其の數多き社殿祭祠は殆ど道徳上の勢力と相隔絶せる感なくんばあらず。北野天満宮に至りて、其講中なる者が何の意志を以て社殿神饌の資を奉納せるかを觀察し、太宰府天満宮に行きて、其養者が何等の祈願を神前になせるかを稽査せよ。菅公が天神となりて却て其人格的感化力を失ひしを知るに足らん。余は全國無數の天神祠が有形の菅公傳たる實なきを悲み、神職が徒に

神供祝祠の末に走り、教育家亦此間の勢力に着目するなきを嘆ずるを禁ずる能はず。世の菅公に對する英雄崇拜的意識をして倫理的修養に有効ならしむるは、一に其人格境遇を發揮し、見識あり才徳あり、忠篤にして熱誠なる人間としての其性格を欣慕同情せしむるにあり。之を天神、火雷神として拜せしむるにあらず、誠實の人間として之を崇拜せしむるにあり。

要之、余輩は、我國の宗教には、英雄崇拜の勢力甚大なるを見るも、其の祖先崇拜に關聯せる者は、氏神なる空名を留むるのみにして、國民の教化修養に何等の効力なく、其の俊傑勇士を拜する者は、其神咒力の祈願に走りて人格欣慕の實力なきの現状を悲しむ。即余輩の希望する所は、教育家たる者意を此に留め、英雄の咒力祈願を轉じて英雄の人物崇敬たらしめ、倫理的教化の實力たらしむるにあり。氏神が氏の祖先として、或は地方の開拓者として、其人物功業の追慕に依りて崇拜せらるるに至らば、氏神、鎮守は學校、教會と相并て町村の道德的勢力たるべく、

菅公、清正公も各其人物の威化に依りて一般人民を教化するに至らば、國民の教育は此に一援勢を得たるに均しからん。

(三十二年八月)

外篇第三
雜
纂

世界有情、盲者能視、聾者能聽、瘖者能言、狂者得念、亂者得定、貧者得富、露者得衣、飢者得食、渴者得飲、病者得除、醜者得端、殿形殘者得具足、根缺者得圓滿、迷悶者得醒悟、疲頓者得安適、諸有情等、心相向、如父、如母、如兄、如弟、如姊、如妹、如友、如親、……身意泰然、忽生妙樂、

大般若經緣起品

シヨペンハウエルの性行

一世の奇男兒シヨペンハウエル熱情愛憎の一生をマイン河上のフランクフルトに終りてより茲に幾春秋、今月の二十一日は實に彼が三十五回の忌辰たり。今や此巨人が絶東の新興國に幾多の景慕者と崇拜者を得んとするの時、又恰も此忌辰に近きて、吾人は轉彼が性行人物を追懷せずんばあらず。世を厭ひ人を惡み、冷笑諷刺の妙を盡し、熱罵痛論の激を極め、ヘーゲル、英國、猶太の三者は之を蛇蝎の如くに憎惡罵倒し、ウバニシヤド、ブラトーン、カントは天上の光明の如くに欣慕信奉措く能はざりしが如き、彼の性行は多くは尋常規矩の外に脱出し、漂渺天馬の虚空に狂奔するが如き者あり、豈快男子と云はざるべけんや。ユリウスラウエンスタド曾てシヨペンハウエルの全集を開版し、又彼が一生と性行とを記する事頗る詳なり、今余述主としてフアラウエンスタドに基く。若し此に依りて快男子性行の幾分を讀者に介するを得ば幸

なり。

シ・ベン・ハウエル曾てプラトーンが説に依りて人の性格を分ちて *eukolos* と *durosolos* に分つ、即快濶と沈鬱となり、而してシ・ベン・ハウエルは實に *durosolos* なりき。何れの事物も彼が心に對しては不快の感を起さざるなく、常に幽鬱にして人を信親せず、又頗る猜疑の念に富みたり、書信に接する毎に其憂ふべき事を齎らし、にはあらずやとの憂慮は、先づ其心を痛め、幸にして其憂ふべき事なきを知るや、此と共に此書狀は其實を蔽へるにはあらずやと痴疑するは彼が常なりしといふ。然れどもデ・スコロスなる人又一得なきに非ず、シ・ベン・ハウエル自らも云へり、

何れの害悪も全く其報償なきは稀なり。沈鬱にして憂慮に傾き易き人は常に寧ろ想像的の不幸と憂慮に沈むを以て、快濶無憂の人の如く實事上に不幸と憂慮に陥る事少し。其故は一切の事物を暗黒と觀じ、常に大悪害の來らん事を恐るゝ者は、又之が準備を

怠らざるを以て、事物を見る常に快濶なる彩色を以てする人の如く誤算する事なし。

シ・ベン・ハウエル又曾て人の性格を分て、熱情的に現在事物に動かさるゝ者と、冷淡に理性に訴へ概念的に生活せる人とを分てり。而して自らは實に此の前者にして、熱血常に情緒を動かし、眼前の事々物々に對して少しも抑制する能はざりき。其千八百十四年ドレスデン府に在るや、自ら記して曰く、

余は新しき状態、新しき境遇に入る毎に其始は必ず不満不快ならざる事なし。是れ蓋し己が豫め新状態を想ふに當りては、理性の指示に従ひ概括して之を見るも、其一旦之に遇ふや、現在の事物は總て豫想よりは活潑々地に己を動かし、此現在の感化に動かされては理性を以て、現在の外を達觀する能はざるを以て、總て豫想したる所の者を此現實より求めんとするが爲ならんと。感情に富む者は常に眼前の事物に感動し易く、如何なる事も其

情緒に根觸して熱血を激動せざるなく、理性の眼を以て無頓着に對岸の火災視する能はず、能く泣き能く悲み又能く笑ひ能く喜ぶ。感情の動く所判断の力之を制する能はざるに至る。シベンハウエルが曾て伯林府に在りし時、怒に乗じて一老女を戶外に投じ、不具に至らしめ、爲に一生之を養はざるべからざるに至りしが如きは、其の熱情的にして現在に動かされ易きが故なり。

熱情的なるシベンハウエルは又甚しく空想の力に富みたり。彼は己が感觸に入るべき實事なき時に當りても、其想像の力は彼に感動の原料を與へて、心火常に消ゆる事なかりしを以て閑坐獨棲も彼に取りては、少しも無聊寂莫と感ぜしむる事なかりきと。其言に云く、
 理性にのみ動かして他の力乏しき人は、他に接しても潤達ならず、亦獨棲に耐ゆるの量に乏し。概念的に生活する人は、其他に直覺的の活動を缺くを以て、之を交際の間補はざるべからず。之に反して想像の力旺盛なる者は、想像に依りて十分の直覺をなすが故

に、實物をも又社會をも離るゝを苦とせず。
 獨坐閑居しても消ゆる事なき熱情は、日常尋常の事に遭遇すれば、又燃ゆるが如き詩的想像を煽動するの因なりき。シベンハウエルは誠に詩人的天才にして、事物を見るも常に之を概念の鏡に映じて望み、特殊の狀態を審みせず、爲に常人の見ざる所を見、常人の感ぜざる所に感動し、悲喜の轉動、憤激、畏怖の發表、人の計り難き者ありき。

天才は常に狂氣に近きが如き狀を呈す、シベンハウエルは時には自ら高聲に語り、時には忽にして笑ひ、又忽にして似聲をなし、一見殆ど狂人の如くなりしと。醫師ザイドリッツなる人は、醫學上より觀察したるアルツルシベンハウエルなる書を著はし、彼を以て誇大妄想の患者なりと断定し、其知覺の異常に鋭敏にして又痛激の心勞働に耐ゆるが如き、皆其腦の遺傳的構成狀態あるが爲にして、誇大妄想症に罹り易き性を有し、シベンハウエルは既に之に罹れる者なりと云へり。ドクトル、アーセル亦、シベンハウエルの精神病學上に審査せらるべき人なる

事を論じたり。然れどもアーセルはシベンハウエル自ら天才と狂氣との相近きを説きて敵手に武器を興へたる者なりと説き、終に云へり、シベンハウエルが常に天才と近しと呼べる妄想は、決して誇大妄想に似たる者なるべからず、沙翁の所謂る

The poet's eye, in a fine frenzy rolling,

Doth glance from heaven to earth, from earth to heaven.

的ならざるべからず。

と思ふに誇大妄想なる者は、眞價もなきに、自ら尊重し誇大的の妄想に陥れる者ならざるべからず。シベンハウエルの如きは自ら大なりと信じたるも、其實亦之に副はざりしに非ず。彼は自らヘーゲル、シェリングを凌駕せりと信じたるも、固より窮措大が自ら一國の政を善くすべしと誇張するの類に非ず。又謙遜退讓自ら小なりとする者必しも大人に非るなり。人豈自ら知らざらんや、自ら眞に偉大なるを覺知して自ら重んずる者必しも誇大症に非るなり。シベンハウエルを目し

て自ら過重したりといふは是なり、然れども之を目して病的となし誇大妄想症と斷ずるは甚非なり。天才往々俗人の爲に輕んぜられ、大人多くは病的と誤らるゝは是非もなき事なり。

狂氣に近きシベンハウエルの行爲は常に尋常規矩の外に出て、熱情の迸る所常道を逸脱し、才智の馳する所毀譽を意とせずして事をなす、社會與衆の褒貶に數々とし細心世に處するが如きは、此鬱勃たる天才の耐ゆる所にはあらざりき。此故にシベンハウエルは、商家の小僧として、主人の命を守らず、自己の好む所の書を繕くを事とし、爲に解備せられ、中學にありては師を嘲りて永く之に留るを得ざりき。放逸不羈は彼が特性なりき。慈母も之と共に居れば悪夢を結ぶと云ひしが如き、其粗落の行を想見すべく、彼が師フヒテの *Wissenschaftslehre* (知識論) 講義に戯れて *Wissenschaftslehre* (知識論) と書せしが如き、其狷介の性を知らるに足るべし。小心世の褒貶に關心し、謹慎細行以て徳行の要を得たりとなす人々は、此の如き放逸狂奔の行爲を見ては、直に不徳とし無道

と貶せん。是に於て知力上にはシベンハウエルを以て狂疾と断せし者ありしと同じく、道徳上彼を責罰すべき罪人と見る者少しとせず。

特に世の學者がシベンハウエルを責めんとするは、其が名譽上の私怨の爲、口を極めてヘーゲル等先輩を嘲罵したりといふ點にあり。然れども是れ思はざるの甚しき者なり。シベンハウエルが一生の初半は憤懣不平の中にありしは事實なり。十分の名聲と勢力とを豫想して其大著作を印刷に附し、直に以太利に旅立し、如何なる動搖を思想界に與へたるかを夢想しつゝ、歸來すれば、其書は徒に書舗の店頭に堆く、世は其書名をも知らざりしが如き、いかで此詩人的多血男子の心緒を動かさざらん。又彼が先天的に忌嫌せしヘーゲルの思想、學界に浴ぐ己が價値なしと断じたる一大學教授なるフヒテが名譽賞讃の中に包まるゝを見て、此熱情短慮の天才は奚ぞ其不平を長ぜざらん。彼は世を罵て俗と稱し、卑といひ、衆に遠かり、人を惡み、全く一個の厭世家、一個の *Misanthrop* となり了れり。大學の教授は彼の眼には心中無一物に

して、徒に講壇の上に口舌を弄し、世を嘯し自ら欺く者と映じたり。然れども其の此に至りしを以て、世の論者の如くシベンハウエルを以て私利の爲に世を惡み、私慾の爲に人を罵る者となすは太た非なり。シベンハウエルは此の如き卑劣の情に動かされて此の如きに至りしに非ず。樞槽の間にある天馬を以て徒に名譽の爲に平ならざる者とし、三保の松原に降りし天女が人間を卑しみ自ら高しとするを以て、徒に私欲の爲に慨する者と見るが如き事あらば、人誰か之を笑はざらん。シベンハウエルは人中の天女なりき、樞槽間に老ゆる天馬とも見るべし。彼は自己の名譽なきが爲に世に平ならざるを増し、俗輩社會に飛揚するを見て憤懣を長じたる事はあるべし。然れども此天才は先天的に世と合はざるの性を享けて生れたる者、罪若し罪といひ得べくんばは彼が賦性にあり、否天公が此逸物を此濁世に下したるにあり。且つや彼がヘーゲルを好まざりしは、既に其青年の時にあり、名譽上の關係より始めて之を憎惡したるには非ず、此事は彼が當時フロンマンな

る人に送りたる書簡に徴して明なり。彼が廿五歳の時、即其大著完成の五年前、既にヘーゲルの論理學を讀みて、殆ど之を輕侮憎惡したるは明白なる事歴たり。

シッペンハウエルがヘーゲルを憎惡し、シエリング、フキヒテ等を輕んじたるに附加して、人は彼を以て先哲前輩の功績を認めず、其恩徳を知らざる者と責むるあり。然り、シッペンハウエルは其憎惡し若しくは輕侮したる先哲の功を認めざりき。否、彼は此等の人を以て滔々たる俗流と同一視し、之を先哲先進などとは惡にだに信ぜざりしなり。先哲とも大思想家とも見ざる人々に對して、其恩徳を知らざりしを責むるは、甚酷なる評といはざるべからず。是れ己を以て他を律する者、人を評するの道に非るなり。シッペンハウエルは、論者の言に反して、實に先哲の功績を認め、殆ど之を過重し之を崇拜せんとするの傾向ありき。彼が如何にウバニシヤドの哲學に心酔したるか、如何にプラトーンの觀念論を崇拜欣慕したるか、又如何にカントに敬服したるか、シッペンハウ

エルの著を讀みし者は何人も之を認むるに難からざるべし。詩人的の天才として彼れが好惡愛憎の情に強かりしは、敢て咎むべき事かは。然れども此を以て、シッペンハウエルは他人に心酔して自家思想の獨立を失ひしとはなすべからず。カントを最も景慕する彼の手に成りしカントの批評は、カント攻撃の最も嚴密なる者の一なる事は、明に彼が堂々たる獨立の思想家たるを示すに餘あらん。猖狂不羈なる詩人的哲學者は、己と合する者は狂喜之を迎ふるも、己と違ふ者は少しも之を容るゝの寛容なかりしなり。

要するに、シッペンハウエルは天賦の厭世家なりき、彼の主觀方面の我情は、到底客觀的社會と調和する事能はざりしなり。故に彼は曾て自ら述べて曰く、

人の世に在ること永きに從ひて、腦髓と心臓は益す相反き、其主觀的感情は愈客觀的知識と背馳す、

と、シッペンハウエルは誠に可憐の憂悶家たりき。云はゞ感情なる惡

魔の爲に従へられて之に勝つ力なかりしなり。若し彼が性をして少しく自ら負ふの心を殺滅せしめば、彼は世を罵りも得せず人を嘲るの勇なく憤死せしならん。然れども、天は幸に此天才に自尊の情を與へて、其情に脆きの性と合せしめたり。是に於てシペンハウエルは常に平ならず常に憂悶する放逸見として其特色を存したり。

シペンハウエルは日常生活の標準として常に自ら稱したり。賢者は快樂を求めず、無憂を求むと。此故に彼が最も注意したるは身軀の健康にありき。王者たるも常に病床にあらんよりは、寧ろ乞丐たるも健全ならんとは、彼の志望にして、世人が或は名譽の爲或は營利の爲、其他博學とならんと欲し、又は快樂を貪らん爲に健康を害する者多きを、彼は至愚と罵りたり。健康は百福の本とは彼の奉ずる格言なり。シペンハウエルは夙に生理學を修められたれば、衛生の法に就きては頗る通達する所ありしなり。

一日に一二時間づゝ戶外に運動する事は必須なりとて、彼は毎日午

後に至れば、飄然一頭の愛犬を率ひて郊外の林間人なき所を散策するを常としたり。其眺望ある所に至るや、必ず佇立之を久らし、天然の美を賞し、其整然又端然たるを見以て無上の樂とせり。又彼は神經を過度に刺激し、筋肉を用ひずして萎微せしむるは、最も健康に害ありとて常に体操運動を怠らざりき。加之冷水浴は其最も好みし所にして、九月迄は雨天たりとも、必ず清冽なる河水に浴したり。腦髓を安息し活潑にせん爲には、最も安眠を重んじ、狼に夜業に従事したる事なく、又食後運動後には、少しも腦髓を使用する事を爲さざりき。晨起後二時間は其が勉勵事をなすの時なり。二時間を経て朝食し、後一時間は安靜に休息し、而して後講義をなし、此より戶外に遊び、家に歸り書齋に入りて新聞紙雜誌の類を閲す。夕は劇場を覽、又は音樂合奏を聞きて過ごし、睡眠に就く前には多くは書を繙きたり。但し其書は彼が聖典とも仰ぎ、之に死を托すべしと迄云ひたるウブネカトなりき、即波斯譯より重譯したる羅甸譯のウバニシドなり。彼が印度哲學殊に吠檀多派の

哲學を愛したる事以て見るべし。
 シンペンハウエルは一生會て室を娶らず、彼は無室を以て學者の本分
 としたり。故に曰く、

學者美術家の中に就て、妻を娶りたる人は、學問美術の幸運を思は
 ずして自己の事に從へる者なれば、甚だ惡むべき者なり、
 と。結婚するを宜しとするや否やといふ問題は、戀愛の爲に心を苦
 むると衣食の爲に營々たると何れか是なる、といふ問題に同じとは彼
 が常套の語なりき。

シンペンハウエルの家政は單純素朴にして常に節儉を旨としたり。
 是れ父の教なりしと云ふ。

其室内も華麗なる裝飾を施さず、一隅なる大理石の棚には金色の佛
 像を安じ、机上にはカントの塑像を置き、安樂椅子の邊にはゲーテが肖
 像を掲げたり。四周の壁に懸けたるはカント、シテスピア、デカルト、ク
 ラウデウスの畫像、其他家人の像、自己が幼時よりの幾多の肖像、故人の

手蹟等なりき。彼が愛犬は常に其傍に侍したり。

シンペンハウエルは實に當世の仇敵なりき、現時の事物は一として其
 愛を引くべき者なく、現時の人と交る事なく、殆ど現時以外の人間にし
 て、只古代古人をのみ欣慕したるの傾あり。然れども彼が當世の事物
 に注意する事は敢て薄からざりき、新紙の類は之を熟讀し、社會、文學、宗
 教の問題に注意を怠らざりしと。死後其書齋を檢したるに、諸國の新
 聞紙を切抜して集めたる者ありしといふ、其著書に事例を引用したる
 が如きは、此の如き注意より得たる者ならん。

彼が晩年に及びて、名聲漸く揚り、其說稍世人に知らるゝに及びては、
 諸方の學者文人にして此老哲學者を訪はんが爲に、マイン河上風光明
 媚の都府に來りし者甚多かりしと。而してシンペンハウエルも亦、此等
 の人と談論し腹心を吐露し以て樂としたり。其晩年には交遊したる
 人も少なからざるが如く、其世を惡み人を憎む事も大に減じたり。
 特に彼の著書が民間に多くの讀者と信奉者を得たる事は、甚だ此不平

家を慰藉したるが如し。一般の良民が信服するは、真正の熱情に出てし者なれば、浮薄の學者輩(彼は常に所謂學者なる者を浮薄無知而も虚聲を張る者と稱したり)の嗷々は少しも念頭に懸くるに足らずと、是れ彼が抱負なりき。

シベンハウエルは齡七十を超ゆる迄頗る健全の生活を遂げたり。七十二歳の春より時々心臟鼓動呼吸屏息等を患へしが、數月の間は差したる事もなく経過したるに、九月に至りて其廿日の朝突然卒倒したり。翌朝は敢て平生と異なる事なかりしに、婢が室を掃ひて戶外に出て再び入り來れば、白髮の老哲學者は既に呼吸を絶して、安樂椅子に眠るが如くに倚れるを見たり。彼が遺言書には其財産分配を限なく記し、一部は戦争負傷者の救助に、其他親友より家婢愛犬迄各分配を指定しありたりと。愛すべき終焉なる哉。

フランクフルト北郊の墓地萬籟寂たる邊、常緑の樹に圍まれたる中、黒色のベルギ華崗岩の削れるが横たはれるは、即此哲學者の四大が安

息せる所なり。碑面には彼が遺言に従ひ何事をも記入せず、只 *Atque*
Sophianer. の字を刻せるのみ。
(廿八年九月)

人生と天然

(一)

世界は或度迄は人間の世界なり。天然萬有といふも、誠人心より獨立したる天然は、吾等の知り得べき所にあらず。文學も美術も徹頭徹尾人生を中軸となすべし。美術は實在を理想化するといふも、此事實に根據を有する者なり。如何なる客觀的詩人といへども、此意義に於ては到底主觀的なるを免れず。然りと雖も純朴なる實在論と單純なる觀念論とが正中なる哲學的立脚地にあらざると同じく、人事一偏の文學も、天然一方の詩文も、共に大なる文學をなすに足らじ。大宇宙は小宇宙に映じ來て始めて大宇宙の價値を保つべく、小宇宙は大宇宙に待ちて始めて成るべし。天然と人生とは交差錯雜因陀羅網の如く融通相映じて、始めて宇宙の大觀をなす。文學美術亦此無礙の圓融境に住して、洵に宇宙の美を發揮すべきなり。

古往古來、詩人哲者多く此一面に偏し易し。野草薔薇に天然の甘美に酔ふ者は、概ね莊偉なる人生の大觀を忘れんとし、人間生活の參差榮爛にして感情意志の微妙神祕に心奪はるゝ者は、多く市井の外に山野天然の端嚴偉大なるを見ず。人心の小宇宙に戀着せざるの天然詩人は、誠に大宇宙を詠じ得るの人にあらず、天然の大宇宙を顧ざる人生詩人は、十分に人間を歌ふの人にあらず。余輩は此二面の無礙なる交差圓融をゲーテに於て見る、客觀的主觀詩人、主觀的客觀詩人たる彼を有する獨逸の國民文學は、又多幸なるかな。

(二)

眼を轉じて我邦の文學を見よ。吾人はゲーテの片影を求むれども、容易に之を得ざるなり。純朴なる萬葉の詩人は、云はずもあれ、平安王朝の詩人は如何。彼等は釋迦が深痛幽邃なる無常觀に感化せられたるが爲に、客觀界に對しても多情なりき、主觀界に入りても多涙なりき。然れども、彼等の多數は歡樂極めて悲哀多し底に、宇宙の悲哀を觀じた

るなり、快樂幸福主義の立脚地に立ちて釋迦の無常觀に打たれしなり。此を以て彼等は佛教の悲壯的觀念に至りては與り知らざる者の如く、感情一片に多恨多涙となりしなり。其人生と天然とは、感情の屈曲を過ぎたるの人生天然なりき、其の客觀的大詩人を出す能はざりしは此が爲なり。其の末流形式的に無常觀に浸たされし者に至りては論なし。

源平鎌倉時代に至りては風趣一轉したり。此時代の詩人は誠に大なる人生の轉變を目撃したり、又實に深く人生に對して眞摯の運命を経歷したり、即彼等は身自ら人生の危機に立ちしなり。其愈事詩は客觀的に人生を歌はんとし、其散文詩は人間の小宇宙を詠出したり。然れども天台佛教の感化浸潤は容易に去り難く、其多くは幸福主義的に人生感情の域を脱せざりき、大なる客觀的詩人は其間に求め難し。支那の雄渾なる山川と、南方清楚の風に養はれたる禪風は、足利時代の詩人を人事の外に遊ばしめたり。柳綠花紅、彼等は天然の歌詠者と

なり、萬法一心の天地を觀じたり。然れども彼等の思想風は微妙なる人生と、之に對する多趣の天然を詠ずるには餘り超絶的なりき、彼等も亦詢に客觀詩人と稱する能はず。

徳川時代に入りては、文學は多く人生を歌ひたり。然れども其人生なる者は云はゞ人事なりき。其範圍は殆ど市井の外に出づる能はざりき。獨り芭蕉あり大に大宇宙を歌ひて徳川文學に異彩を放ちたり。吾人は彼に許すに大小宇宙圓融を以てするも、其大なる事に於て彼に許すにグーテを以てする能はざるや論なし。

之を概するに、我過去の文學は人生と天然とに於て圓融自在の境に遊ぶに至らざりしなり。特に大宇宙的觀想に乏しかりしなり。佛教の感化として甚深の悲哀觀を歌ふ者はありながら、其の圓熟十分に人生を捕捉する能はざりしは、其の天然に遠かりしが爲なり。源語の如き彼程の大作にして其の如何に天然に遠きを見よ。僅に前栽庭園の天然にあらずんば、漸くにして木幡山、宇治川の天然のみ。

宇宙の深大に接せずんば、奚ぞ天地の崇高を觀ずるを得んや。崇高に缺く、又何ぞ人生の悲壯に闖入するの祕鑰を得んや。我過去文學の偉大ならざるは此が爲のみ。

(三)

我文學は天然を大觀せず、是れ其缺點なり。明治の文學亦其祖先の子たるに背かず。明治の文人は人生に疎なるにあらず、而も客觀的詩人の能く深く人生を畫く者なし。蓋し彼等に大宇宙の觀想の根柢なければなり。既に側面の人生に満足し、偏に小宇宙の内に彷徨す、其人生は斷片偏面の人生に過ぎず。我文學に道念の乏しきが如き、又は作家の眼光が作家自身の境遇を出てざる、又は詩想に高大なる哲理的根柢を缺くといふが如き、此等の批評を受くべき缺點は、皆其餘りに小宇宙的なるが爲なり。我文士が人生に對する注意着目の足らざるにあらず、其大宇宙の根柢が缺けたるは彼等をして殆ど盡く單に主觀的詩人たらしむる所以なり。

此缺點を矯め、將來の大文學に備へん爲には大に天然を絶叫せざるべからず、吾人戀愛に於ても大なる戀愛を我文學に要求し、滑稽に於ても大なる滑稽を要求するも、亦此と意義を同じうす。我詩人は何故に大宇宙の神祕的戀愛に着目せざるや。

世願くは誤解する事勿れ。吾等は天然を絶叫すとて、徒に山川を詠じ草木に情を寄するのみをいふにあらず。花袋が多く天然の風景を叙じ、麗水が行を紀して大澤森林を筆にするが如きを以て、大詩人の能事となす者にあらず。天然其物の爲に天然を云々するにあらず、人間の世界としての大天地に親炙入神し、以て眞に大宇宙の寫象たる小宇宙を抽出せよといふにあり。

Statt der lebendigen Natur,

Da Gott die Menschen schnf hinein,

Umgiebt in Rauch und Moder nur

Dich 'Thiergeripp' und 'Tottenbein.'

と。是れ人生の大歌詠者たるゲーテがフアウストをして人の局限を嘆せしめたる所の者なり。明治の詩人よ、何ぞ生ける天地の大を我が有とせざる。

(廿九年十二月)

現代社會と諷刺文字

(一)

現時の社會は一の諷刺文字を要せざるか。假令文學は高妙の理想界に其本領を有するも、文學は又國民と時代の子たるを失はず。假令小説詩歌は國民の教育を本務とせざるも、抑又多くの矛盾を有する時代には、多くの諷刺文字出て來るべきは理勢の自然にあらずや。我現時の社會は洵に矛盾衝突充滿せる社會なり。否我社會のみならず、十九世紀の末葉は、實に撞着支梧の現象に富みたる時代にてあるなり。

一方に於て物理自然の解剖徹を極め細を盡くせるに、一方にては電雷をも花月をも人の如く靈ある者として詠ずるの詩人得々たり。近頃電氣の美術的表象を如何にすべきやとの説ありしも、此般の撞着より意識し來りし者なり。又エマーソンが韻文の末路を道破せしも、此間の消息を漏らす者にあらずや。此の如き時勢文化の撞着は、既に近世萬有學の開け初めし十八世紀末より、處々に諷刺文字を喚び起しぬ。スピフトが人を造る機械を計畫する教授を畫きしも、此なり、又フアウストの説話の如きも、或る意味にては此撞着を叙白せし者として、現代の描寫に移し得べきなり。是れ現代の一端なり。

翻て特に我國を見れば、多く諷刺を要する者を見る、戦勝の餘榮には鋭氣勃々たりしも、一旦の挫折には臥薪嘗膽の聲も力なげに、殆ど麻痺中毒の状態を呈して呻吟咽嗟の間にあるなり。坪内氏が曾て戦後の我國を一箇人にせば如何なる性格なるべきかとの問を出せしが如きは、此奇觀に對する一大諷刺文字を要求するの聲にてはあらざるか。

其他政黨の争を見よ、宗教家の狂奔、上流社會の腐敗、下層の妖教沈溺、學生の無氣力、家庭に於ける古風と新風との衝突、教師僧侶の敗徳、在留外國人と下層人民との關係、藝妓賣女等の紳士俳優に對する關係、妾宅、待合の内面、相場社會の内幕、新華族、紳商等の狀態、殆ど枚擧するに遑あらざる社會現象は矛盾撞着笑ふべくして、而も悲むべき者のみにあらずや。而して此間諷刺文字の出づる少きは何の故ぞ。文士作家の此豊富なる材料を目前に看過するは抑も何の意ぞ。吾人は現代の多く諷刺文字を要し、又生出するの時なるを信ずるを以て、大に作家の着目を喚起し、特に諷刺家の資ある露伴、諷刺の試作をなせし風葉等諸氏に向て、一掬の清涼劑を世人の渴に投ぜん事を冀ふ者なり。

(二)

サカレーが會て富人の銀皿盛るに粗食を以てするを畫き、奢侈に對して諷刺嘲笑せしが如く、奢侈は大なる矛盾なり、故に又可笑なり。此可笑を種として、此人生社會の重要現象を詠ぜよ。現時の社會は此ユ

ーモルの好材料に充滿せり。高利貸の老婆が貧民の血を絞り來りて、之を生白き醫學書生に注ぎ込み、蕩藥を盡せる痴態も惡むべき奢侈ならん。當世紳士が美姬に圍繞せられて金銀を蒔き散らしながら、蕩底の空虚に醜態を顯はす周章の狀も笑ふべき奢侈の矛盾ならん。實際社會の虚飾、書生の盛裝、滅金の金鎖、綿入の艶衣、何れか慨すべき可笑ならざらん。世は先に頻にユーモル文字を要求したる事ありき、作者亦之を試みたる者なきにあらず。而して今や世の道徳は退きて、主我自利盛に、國民の富は著しく増殖せずして、奢侈は甚しく昂進せんとす。此現象を捕へて可笑の文字を作り、可笑嬉笑の間に眞摯なる教訓を國民に傳へんと欲せば、今の社會は競て之が材料を給供し、而して悲惨悲哀に飽きたる讀者は之を歓迎せん。今の文壇に一サカレーなきか。

(三十年二月)

精 靈 教

精靈教とは万人万象皆同一精靈の分化なるを信じて、博慈同情の心を本とし人道徳義の光明に依りて、淨土樂園を此土に下すべきを教ふる宗教なり。其の大本は基督教の贖罪救済の教と吠檀多若しくは佛教の万有一体の教とに立ち、其名は神と基督より一步を進めて精靈を主義とするに出づ、即佛教の言を以て云はゞ佛性教といふに同じ。此一派同盟の起りしは獨逸と澳地利にあり、其傾向神祕的に傾く所なきにあらず、其一部分は内祕的基督教 (Esoterisches Christenthum) と稱する者あり、其一部分には或は印度の神智學に同情を寄する者なきにあらず。然れども此派は博く人道を目的とするが故に決して教規宗儀を立てず、其運動は雜誌書籍若しくは慈善事業に依り、内面祕密を主とするの傾向なきにあらず。ミュンヘンの心理學會、ロンドンの内祕基督教同盟の如き此派の流に屬すと雖も、彼等は直接表面に傳道する事をなさず。信者を得る事其目的にあらずして其旨意を万民の精靈に吹き込むにあればなり。然れども此派に同情を表する者今や歐米到る處に發見すべく、彼等は互に精靈精神の交通結合あるを信じ、又派外の人と

雖も終には此内祕微妙の結合に入るべしと確信せり。我師ケイベル先生、亦此流派に關係を有し余に其の同盟の旨意書を與へられしを以て茲に曝出す。此檄文亦現今我邦宗教の時弊に光明を與ふる事なきにあらざるべし。其精神の如き苟も眞學道を受する者の首肯する所ならん。原文は森殿の詞を備へ熱意人を射る者あり、譯文は其一字一句をも取捨せずと雖も、只其氣力と熱意を傳ふるに足らざるを如何にせん。

精靈教萬國同盟結合の檄

宇内の眞理と人道とを愛する人に告ぐ

高尚の感想を有する人は、疑惑と無信との不安落窶を脱して、精神と心情とを満足せしむべき道德的世界觀を憧憬すること、沙漠にありて渴に苦しむ者の滾々たる清泉に向て走るが如き者あらん。余輩は知る、貴賤僧俗を問はず、苟も高尚の心を有する者は、甘じて敗餘僅に残存せる信仰形式の賤むべき羈絆に服せず、必ずや翹足眞理の光明が輝かん日を望みて動かざるを。何となれば今の時、眞理の聲は

潜みて、人之之が神聖なる救済の福音を傳へんとする者なし。絶智主義既に巨蟒の頭を擧げて其毒焰を吐かざるも、其毒氣は細蛇の如く潜行して眞理の聲を屏翳せしめんとし、詐偽は無慚にも盛裝横行して其巨大の領域を擴張せんとす。

思想家が互に吳越徑庭せる持論を抱きながら、同じく古來の信仰の形式を保持するは、一に彼等が此形式を以て公共の秩序を維持するに必要なりと想へるに依るのみ、是れ公然の祕密に非ずや。古風の夢想は、星辰無限に羅列せる此宇宙の間、天にも地にも到底容れらるべき餘地を有せず、是れ公然の祕密に非ずや。社會の嚮導者たる人々にして、欺騙民衆を愚にし此に依りて其教權を保持せんとし、公然自ら是なりとするが如き、宗教を政治の不義なる機關と汚辱せんとするが如き、詐僞の泥澤に社會的秩序の基礎を建設せんとするが如き、又飽くなき獨尊の心と限なき残忍の迷像とを本尊とし、之に依りて道德を維持せんとするが如き、何れか吾人の最も赤面慚愧すべき事にあらざる。今の

世に古來の形式を無心に信奉する人々が證據とする處、吾人は之を敬せざるに非ず、而も此等の人々は社會の先導者として勢をなすに足らざるを信す。

而も尙限なき自利と自尊の夢想も、自ら爲に謀らず我を棄て、人生の煩悶と其荆棘を負はん極美の慈愛に對しては、没滅するの外なからん、責罰を受けて懊惱せる無数の同胞は棄て、顧みず、自ら高處に超然として自家の惰眠を貪り娛樂に耽るが如き華胥の夢界は、人生の苦戰健闘の中に碎勵精神を高尙に清淨にせんとし、且無涯の慈眼を以て世の罪惡を懲まん慈悲心の莊偉なるに比せば、將に顔色なからん。古信仰の表號や、表號としては誠に詩的韻致を有し、又神聖なりといはざるべからず、而も高尙の思想を有する者は、文字的解釋に甘んずべきにあらず。限なき自利心と飽くなき残忍との怪物は、之を神位として崇拜せる昏迷せる者及墮落せる者を捕へて、之に地獄の苦責を與へんとす、其怖るべきは全身火なるモロホの怖るべきも及ぶべからず、此怪物と

現時の道德心と兩立し難きは誠にサトルンの非行、エビタルが戀の爲になせし狂行が新興の耶蘇教と相容れざりしよりも大なり。而も、幾億の民は口舌の上にも其教を容認し、僧侶は其信仰の互に特なるを外にし、心情少しも之を信ぜずして徒に此教を説けり。

人生不羈を冀ふ。然れども功利の心、屈從の情を偶像として其前に跪く世界に、自由といふ、豈空花畫餅に終らざらんや。

宗教の上には平等無差別を説く人も、他を屈服せん事を冀ひ、害惡の因何れにあるかを知らざるなり。人類は博愛と同胞共和に依りて高尚なる進歩的の社會を形成せんと勉む。而も地上天空に自利をのみ尊崇し、神的慈悲、博愛等の語は徒に虚飾偽善の用をなすに過ぎず、自利の迷像と博愛とを混じ、名利心と獻身とを亂り同時に基督と惡魔とに事へんとするが如き世界に、如何にして此崇高の目的を現實にするを得ん。道德を説くも如何にして此般の基礎に眞正の道德を建つるを得ん。根底たる眞鍮なくして如何にして道德を實行するを得んや。

虚偽は人類を擧げて不徳に化し、道德の基礎を顛覆し、上よりは、貧者に負はしむるに耐え難きの重荷を以てして自己は指だに之に、れざる如き極醜の情慾と放逸の娛樂とを以てし、下よりは卑むべき憎惡、嫉妬の情を解放し、陸梁せしめ、以て人文の貴ぶべき美果を殄滅せんとする最も恐るべき慘局を催促するを見ずや。此時若し眞理の神聖なる光明が人類を普照する事あらんには、社會的關係は忽にして面目を革新するを得ん。

余輩は彼泥濘に沈溺し了らんか、將昇耀たる天上に到達せんと勉むべきか。余輩は一切世間の光明界を欲する人に檄するなり。余輩は一も教理宗義の制規をなさず、精靈教の万国同盟を作らんと欲す。余輩は一切の聖典が含有する精神的深意を容認す、就中概して福音書と聖書とを容れ、又印度、波斯、其他文明國の聖典を容る、余輩は文學美術の大作中に盡く神的啓示の存するを見る。余輩の建設せんとするは宗派にあらざるが故に、何人にも其持論を棄てよとは云はず、余輩が宣布

せんとするは精靈の宗教なり、真理の宗教なり、一切諸人心靈中の秘奥なり、一切宗教の埋伏未だ顯れざる心髓なり。余輩の拜する神位は精靈の朗日なり、万有の本躰なり、萬有の中に自己を沒了し、而も常に其中より不可説の莊麗光明を發し、一切の實物特に人類中に眩耀する本躰なり。諸物の元平等一味なるを知り、此最高の自覺を明にせば、一切の有限と差別は、星光が太陽の内に消え、水滴が太洋に沒せんが如くに消滅し去らん。此故に吾人が拜する神位は此世界の主宰に非ず、獨宰の君主に非ず、一切万物の不羈自由なり、一切万物の親愛共和なり、一切に超え、一切に存する愛情なり、一切を透徹し、一切を自己に攝取する活ける理想なり、此故に又惡毒を解除し蒙迷を啓く驅暗なり、一人をも失はしめざらんと念ひて斷ゆる事なき良牧者なり、醫師なり、此神位は何人をも判せず、而も惡は永劫其驚歎すべき裁定を免るゝ事なし。

是れ人の中に存し人の中に彷徨すなるイスラエル人の神位なり、是れ佛陀が依て以て一切の中に沒したる無限の慈悲同情なり、是れマホ

メットの心中に發現したる樂園の清淨光明なり、是れ一切人類の心中に充滿し、福音書中基督が暗々裏に使徒に傳へたる心内天國の内秘にして、余輩が明に世に宣布せんとする所なり、是れ一切の人を輝かせる心内の基督なり。

吾人の心中には諸の星辰を越えて變るなき無限の思想躍動せり、吾人の心中には一切の人たる者を結合せる彼の愛情の脈搏鼓動せり。此故に何れの人も皆神的本躰なり、無始無終常住不變に發して精神ある個人の中に存する神位なる太陽の光線なり。何となれば樂園は何れの心にも潜伏せり、墮落の極にある者と雖も之を有せざるはなし、吾人は只之を覺醒するあるのみ。精神的なる者は其個性其思想の中に天地を包括したる者なり、一切の精神と合一したる愛の生命なり。心靈の生命を己が愛する精靈の深淵に投じたる者は、亦之を失はず永く其生を保たん、故に吾人は吾永生を此精神の活命を保つべき基礎の上に觀じ、又吾人と精神的に近親なる人々の團樂の中に之を觀ず。永

生とは此に外ならず吾人は今既に愛情の中に永生を有す、体制は幾度か組織を解くも愛情の範圍には此生永く盡きざらん、而してこの体制なる者は有限の形骸中に天國的愛情の原態を表し、人の精神として天國の光明を反映せる者なり。

真理の爲には進で制規の下に立たん崇高なる勇氣ある人、此等の人
は余輩と共に行かん。

無限の慈悲を垂れて世の憂苦と罪惡とを救はんとする人、此等の人
は余輩と共に行かん。

自ら犠牲となりて其兄弟姉妹の福祉と子孫後昏の幸福光明を畫策し、己を照らさん樂園の光明を此光明の中に觀んとする人、此等の人
は余輩と共に行かん。

然れども自利と屈從の心に激せられて唯自己の幸運のみを求むる者、
偽善唯自ら愛し而も自己の人格を全くするを知らず、徒に虚飾を張り、
滔々たる敗徳の醜骸を蔽ふに一時の彩色を塗抹し、以て諸惡毒の根を

保護せんとする者及、ピラートの如く、傲然真理と人道の最も貴ぶべき
大義を輕んずるの風をなし、以て自家の怯懦弱行を蔽はんとする者、此
等の人
は余輩に遠からん。

余輩は反復して告ぐ、憂苦に悩み煩悶を悲む人は、只世界を救はん真
理のみ之に安立と自由を與ふるを得んと。

此同盟に加盟せん諸君は、始には其數少なかるべきも、諸君は世界の
活ける良心たらん、詐僞と敗徳に陥れる人類を警醒して真理の聖言を
傳へん聲たらん、其聲は常に力を得て膨脹し、宇内勸善懲惡の鼓鼓とな
らん、諸君の力は微弱なるが如きも、諸君は千歳の燈明となり、爾曹は地
の鹽なり、爾曹は世の光なりとの使命は再ひ諸君の上に来らん。

此同盟に加盟せん諸君の胸中には神聖なる、人類の中に最も偉大な
る思想住せん。此思想の光明を以て世を照し、一切の人に彼等が天國
の門戸を開く。

諸君は悉く神位なる太陽の同一源より發せる光線なり、活ける慈悲に依りて天地を包括する諸君の精神は、大さ宇宙に同じく大なる一切に等し、是れ只諸君の神的本体が發現せる者に外ならざればなり。

諸君は自己の外に服すべきの法を有せず、諸君自己即法なり。諸君は何れの人にも其本然同一の形態中には固有の神位本体、同一光明の光、同一神格の神位存するを認めん、人々を神聖にする者は即諸君が本體の神聖なり、人々を啓明する者は即諸君が自家精神の明なり、人々を蒙蔽する者は即諸君自己の神的本體の蒙なり。是れ即天國の復れるなり、是れ即天國の鎖鑰なり、是れ即外面より壓制して人の品格を汚辱し諸君を奴隸賤夫と見る法規制裁の一切の束縛より脱離するなり。是を會悟し得ん人の心中には、尙高輝かん、一切世界の貴高は此尙高に比せば顔色なからんのみ。

余輩は一切外部の縛繫を棄てたるが故に、何人をも外部より制裁せず。諸君が善をなさんには、奴隸的感想の人々の如く躊躇逡巡する事

なく、自ら重んじ、自ら明にして、後に來らん人類の中に天國を降すに備へ、彼等の間に諸君が永生の曙光を望め。神聖の事物を増進したる人は億兆と万年を照さん。

此思想は諸君が崇高なる事業にして、又諸君を際せん石齋なり、此石齋や人類救済の進行中諸君をして煩悶と生死を超えしめ、諸君が今既に古郷と見し慈悲の天國中に生れしめん。同志を結合し而も何れの人をも拒まざる範圍の内に諸君は互に同胞の情を以て結合せよ。終には世界に炎燄を漲さん、聖火を今は靜に家より家に傳へよ、已むを得ざるに當りては、滔々たる詐偽の勢力に伴はれて公然制規に服すべし。我が同盟は此故に黨規束縛を立つる黨與に非ず。我同盟は自家本體を直覺せんと覺醒し、精神的に不羈なる人々の精神的結合なり。我同盟は眞理の此普遍なる證明を作るに外ならず。此に對して敵視反抗せん者は眞理愛護の證明に反對するに外ならず。

吾人が此證明の爲に疾呼し、又吾人が宣布の文書の爲に又時々公會

を開き其他之に類する目的の爲我同盟の議に依りて、神聖なる事業の爲に有志の義捐を募るも皆此等神的不羈なる人々に一大共同運動の機会を與へんが爲のみ。

(三十年一月)

餘裕と宗教

或人のいひけん如く、靜肅安穩に良心を練磨し考察を鍛鍊すべきは過去の事となりぬ。所謂十九世紀の文明は、世波抑揚常に生存競争の怒濤を何れの人の周邊にも寄せ來り、一日も安穩に、一時も沈靜に、日常必要以上の事物に心を寄するの暇なからしめ、商も工も將た學者も政治家も思を閑題目に馳するの餘裕なきが如し。其極は最も餘裕の自由に出づべき文學も社會的となり、最も有形を離れて心靈界を支配すべき宗教家も其事業の大半を社會事業に奪はれんとす。

競争は進歩の要契なり、多事は改良の動機なり。吾人は決して或一部の退縮的隱者の如くに、十九世紀の文明を咒咀する者にあらず。狂瀾怒濤は人生の眞面目と眞價値とを發揮し、其眞品性を鑄治せん。さりながら人は有限の機軸なり、凡ての機關は休息なしには破損を招かん。特に人の心性は餘裕を要求して止まざる者なり、人心は必需切迫

の事にもみ働けば、終には其必要に應ずるの働きをなすの力をも失ふに至るを常とす。多事の活動をなす者は、其の多事多忙に應ずる丈の心霊的基礎なくんばあらず。此に於て、人は實務以外に自由餘裕を要求して止まず。此要求は發して美術となり、小説となり、或は花に戯れ、月にあくがれ、水の中に、陸の上に何事か遊戯をなさんとす。而も此閑遊自由の滋養は、即人をして其實利多忙の生命に應ぜしむるの養源なるを知りて、勉めて心霊の養源となるべき閑戯を擇べる人果して幾何かある。或は酒に溺れ、色に耽り、妓に戯れ牌を弄して、此餘裕の要求を充たさんとする者、世舉て皆此にして、特に一國の元氣精英となるべき、政治、商業界の人は、主として此の如き有害惡徳の遊戯に耽る者比々皆然り。

此等の惡徳遊戯に代えて、美術文學の推薦すべきは吾人の喋々を待たず。只此上に吾人が此等の人々に勸めんとする所は、有爲繁忙の人々が其餘裕の要求を、一層高遠に一層心霊的なる者に依りて充たすの

方法を講ぜん事にして、而して吾人は宗教を以て之が好方便と推薦するに躊躇せず。宗教の聖典を玩味するも可なり、高僧に參して其教を聞くも可なり、若くは靜肅なる寺院に詣し、香を焼き眼を閉ざして靜に冥想するも可なり。

吾人が宗教の心髓と信ずる所は今直に此等の人々に向て説くを要せじ。而も尙宗教的題目に心を潜むる人あらんか、世界に關する秘奧人生命運の疑問は、簇々として生じ來らん。吾人は亦多事なる十九世紀の事務家に一々此等の疑問を闡明解釋せよとはいはず、又必しも一宗一派の教ふる所に從て、此解釋に定説を抱くを強ひず。而も尙此等實務の人にして一度此疑問を提起して、徐に靜に之を玩味するに至れば、庶幾は百忙中一箇の閑方面を得、所謂靜肅なる良心思考の鍛鍊は、此處より生じ、徳性を養ひ品性を練るを得て、難關繁忙亦之を裁斷するの難きを減じ來らん。活動は餘裕の養源より出づべければなり。

眞實なるグラッドストーンは、何に依りて多事の政局に當りしか。剛

毅なるピスマルクは、何の養源に依りて、多難の帝國を一轉して泰山の安きに置きしか。此等の人々は必しも教會の信者にあらず、而も上帝の一信仰が其事業の大源泉となりしと告白するは、決して其政畧の虚託にあらずるなり。之を今の我國にしては、渡邊國武、島田三郎の人々が、多少他の切々たる政治家と面目を異にするは、其心靈的餘裕に因るにあらずや。

謂ふ勿れ、多事他を顧るに追なしと、激烈なる競争場裏に、聘馳せんとする人は、其れ丈の心靈的修養と餘裕なくんばあらず。幾百の聖典は甘泉滾々盡さざるの深味を貯へて汝の前にあり。今日或は就て教を乞ふべきの高徳淨土甚だ多からざるべしと雖も、幾多の境内清閑にして塵事を絶するの淨刹は都鄙至る所にあり。牌を弄するの時を割愛して、試に法句經、福音書を繙け、或は外國語を能くする人は、吠隨、アヴェスタをも讀め。塵事に熱殺せられたる腦髓は此に依て新涼を呼吸するの思あらん。夏時冬期、旗亭旅館に豪奢を極むるの間、暫く去て禪菴佛

寺に靜坐せよ、心靈の奥は今迄自己にも語らざりしの幽趣を語り來りて惜まざるべし。

茶も可なり、花も可なり、謠曲音楽乃至繪畫、寫眞、遊獵、讀書尙可なり。然れども沈思せよ、宗教を味へ。人心宇宙の秘奥は、如何に實務惱殺の人を活かし來るべきか、此間に養はれし新鮮の涼氣は個人にとりて幾何の利あるべきか。况や一國一社會の主腦たる有爲の人々にして常に此心懸けあらんか、國家社會の元氣は如何に揚り來らんか。

吾人の言を以て我田引水となす勿れ。今日政治界實業界の形而下的物質的惡潮滔々たる下に、確に政治家實業家の一部に此種の傾向を呈しつゝある少數の人あるは吾人の認むる所なり。富豪乃至投機商にして幾何かづゝ形而上の事に注意する者を生じ、或は圖書館、貧民學校を建設せんとする者あるが如き、豈此間の消息を漏す者ならざらんや。天下社會の趨勢は、永く實務家をして實務以外に何等の良心なき人として止む能はざらしめん、生存競争は心靈的源泉の確實鞏固なる

人に左袒して、此修養なく餘裕なき人を倒さん。今日實利と不徳の遊戯に蠢々たる人々豈猛省せざるべけんや。

然れども誤解する勿れ。吾人は宗教を以て實務家の玩具に止まらしめんとするにあらず。宗教は眞摯なる人生の高遠なる指導なり、遊戯閑事にあらず。然れども其の高遠なるだけ又有力なるだけ、眼前の實利以外に大なる餘裕に依りて之に入るを得べし。實務家よ、試に其餘裕を此間に注ぎて其高遠の指導に接せよ。(卅年十一月)

信仰の一貫と信仰の多面

Vigorous assertions are characteristics of youth. (一徹なる断定は青年の特質なり)とは何人の知言ぞや。此は眞なり、此にあらざる者は皆偽なり、我既は是なり、此以外は皆非なり、と断定して自ら定説確信あるが如く信

じて、他を罵倒するは、實に未だ思索と眞理探求の奥に達せず、僅に論理書一卷を閱讀して天下の眞理此外になしとする青年血氣の致す所なり。特に信仰の問題は單簡一命題の決して盡す所にあらず。一貫の信仰ありて深く微妙の味を解するに至れば、其れだけ何物にも眞理妙諦の潜伏せるを發見せん。醜惡なる蛙の頭にもゼムあり、况や同じく人心に宿れるの信仰に於てをや。言説は思想の具なりと雖も、言説は必しも一切の蘊奥を盡さず。人の信仰は一方にては言説的なると共に又直観あり、否却て此直観は人々安心の依て立つ潜在的根底なり。然るを信仰安立の問題を論ずるに當りて、其言説命題の末に依りて一徹の断定を以て、彼を非とし己を是とするが如きは、自らにも一貫の信仰ある者にあらずして、自ら言説の奴隸たる者なり。

信仰一貫せる者は信仰鞏固にして深遠なり。此鞏固と深遠を以て錯雜せる人生を觀じ、又他の眞摯なる信仰を批判す。物として己に融解し事として自ら會心せざるなし。此を以て、一貫の信仰は多方面なる

の觀あり、多方面なりと雖も自ら守るなきの折衷温和にあらず、自ら一貫する所ある包容融和なり。包容とは恬澹にあらず、又排斥と一轍の斷定とは決して一貫の信仰に出づるにあらず。

排斥一轍は青年の稚氣に出づ。然れども青年も思慮練達して一貫の信仰あるに至れば、偉大なる精神の存在を發揮し來らん。今日の信仰思想界尙青年の稚態を呈す、然れども其が壯年の精神に達するの日は、遠きにあらず、之を先導する先覺の責決して少小にあらず。

(卅年十一月)

佛教方便の觀念

政治家政略の奴隸となりて政治の大本終に立たず、宗教家方便の觀念を抱きて、教化の大事終に行はれず。

是れ幾多失敗の歴史が擧て證明する所なり、眞摯の教化は徹頭徹尾眞摯にして、一點の詐偽一點の策略あるべからず。一點の策略なく短刀直に眞摯の教化を施す、是に於てか眞心の熱情信仰始めて人の肺肝に入り人の心情を融化するを得。古より信仰を宣傳し、教化を宣流する人のなす所、皆此眞摯の一點に外ならず。釋迦は菩提樹下悟得の四諦眞理を以て直に鹿野苑裏の比丘に説きしが故に、五比丘は直に化せられたり。モハンメドは其天使に聞きし所を以て、直に其妻を誘化して、終にメデナの市民を化したり。

然るに何事ぞ、近頃の宗教家方便を口實とし、策略是れ事とし、策略を以て人を化せんとするが故に、人亦策畧を以て之に對し、紛々人は歸向を失して安立の途に迷ひ、擾々教界は争鬭利慾を事として人をして信仰界の前途如何に惑はしむ。而して方便策畧の觀念多き者今日佛者を以て最となす。佛僧の多くは共に語るに足らざる、否共に齒するを快とせざる者のみ。其少數の相語るに足る者亦曰く、我に深遠の眞理

あり、然れども末法凡愚の入り難きを如何にせん、須く善巧方便を以て人を化せんと。彼等が公開と内秘とを判別するの甚しきは、常に他人を目して門外漢共に佛隨の大眞理を語るべからずとなす。然れども彼等が深遠の眞理となす所は眞に彼等の信仰了解する所なるか否、只一片の相承文字を得て、徒に其理を高遠なりと空想するのみ。試に今日の佛僧に果して眞に華嚴の事々無礙の教に依りて悟得安立を得し者あるかを見よ。彼等の上々なる者も多くは死文字の了知を抱けるのみ。嗚呼釋迦は果して華嚴の眞理を内に秘して僅に四諦の眞理を鹿野苑に宣説せしか。然らば何ぞ彼の言の浮華にして、此四諦の眞實可憫なる。思ふに今日の佛者をして方便の觀念に支配せられ、内に信仰なくして外徒に善巧方便を説き、人をしてうそ方便といはしむるに至りし最大の因由は、天台の五時教判にあり。天台は方等を方便とし、般若を方便とし、獨り法華を以て四十餘未顯眞實後の眞實なりとせり、爾來佛者常に方便を唱へて方便の觀念に失配せられ今日の如きは此

觀念の爲に全く其教運を殺し去らんとす。試に思へ釋迦は菩提樹下に自ら覺者佛隨なりとの信仰を得、而も四十年の間眞實に自己の熱情を吐露せず、人を方便説法の中に彷徨せしめ、而も佛隨なりと自らも許し人にも稱せしめたりとすれば、彼は異常の冷血なる詐僞者のみ、僞善者のみ。佛徒をして教祖を見る事此の如くならしめたる天台は、實に佛隨の大罪人にして、又民衆の誤導者なりといはざるべからず。

佛教は天台の五時教判、眞言の顯密判釋の爲に終に煩瑣文字の奴隸となり、衷心信仰なき、うそ方便の詐僞者となれり。乞ふ吾人の言の餘に激烈なるを責むる勿れ、眞に佛隨の精神を思ふ者は如何にして今の方便佛者たるを得ん。小説家露伴先に「毒朱唇」を作りて佛隨の眞摯なる信仰と精神とを歌ひぬ。佛者はうそ方便の奴隸となり、彼等の所謂門外漢は却て佛隨の精神を道破す、佛教の衰ふる洵に故なきにあらず。昔はジニスイト派「目的は方便を正しくす」と説きて、如何なる方便をも嫌はざりき、此を以て一時の盛運は人心の混沌と共に南柯の一夢となり。

新世紀の文明は、今や諸の方面より眞摯なる信仰の運動を見んとす。佛者は此般鑑に鑑み、又深く教祖の精神を思ひて、早く其方便の觀念を捨てざるべからず。

然れども、その方便の外に、眞の信仰が消え失せたる今日の佛教は果して、此唯一殘存の擬寶を捨つるを得るか。佛教の青年にして將來の革新を志とする者大に此間の覺悟なかるべからず。

(卅一年一月)

社會に於ける佛教と基督教と

基督教は實力なりとは、基督教國の豫言的詩人の屢唱道したる所にして、又萬人の認むる所なり。其實力の現はるゝには、或は思想界に於て哲學者倫理學者に影響し、或は美術的製作に、或は詩文に、乃至政治上

の關係、經濟の動搖、社會の大勢に實力の現はれざる所なし。然れども是れ等は特に基督教をして獨り其社會的勢力の大なるを誇稱せしむるに足る者にあらず。何となれば儒教にありても、回教にても、佛にても宏大なる組織を以て國民を感化し來りし者は、此種の實力とならざる者なく、歐洲の學者が基督教の本質は神學にあらずして實力なりといへば、我も亦佛教の本體は宗義宗乘の論にあらずして實力なりといひ得べく、而して其實力は佛教國特に我國の思想界藝術界乃至政治社會に、彼と同量に現れざるなきなり。此點に於ては、吾人は佛教と基督教とに根本の差異優劣ありとなすを否定せんのみ。

然れども二教の實力即社會的勢力に就きては、輕々看過すべからざる差異の存するあり。何ぞや、其根底の深淺是れなり。基督教の實力は其發表の表面大なるも、歸する所は家庭の感化に出でず。基督教の徳風は家庭團欒親子親和の間を薰じて、其香氣は馥郁として社會の表面に發す。幼兒が慈母の懷にありてパンヤンがビルグリメージを開

き、嚴父の膝下に跪きては山上の訓誡に接し、而して此等の薰陶を統ぶるに基督の神人的人格を以てす。此を以て其源泉永く盡さず、其薰風亦永く基督の人格的感化を離れず。此に於て其より出づる所の宗教は神學を本體とせず、儀式を尊とせず、人心の奥底に浸潤して、抜くべからざる靈火を以て其實力を本質となす。

然るに、他方に於て我國の佛教を見よ。佛教は始よりして佛像經卷の佛教として我邦に入り來り、朝廷權臣の歸依に依りて、一國の勢力となり、國土安穩若くは疫癘退治の祈禱の爲の故に、國分寺の建立等に依りて國內に蔓延したり。其始よりして既に印度の原始佛教の如くに佛陀の人格的感化を離れ、未來世祈禱の功力に依りて民心を得たり。後世淨土門起りて弘く下層の人民をも感化するに及びても、其方法は切々孜々日常の德行に於て之を薰陶するよりは、寧ろ朝暮の勤行、死者の追祭若くは繰珠唱名に依りて、所謂後生の一大事に懸念するを以てしたり。此を以て一家は朝暮の勤行に於て相集り合誦讀經するも、其

は家庭的團樂にあらずして、宗教的公共儀禮の性質を有し、其經文は如何に高尚の哲理なるも道徳に切實なるも、ニヨゼガモン乃至サライニコの外國語のみ。其他にありては本山參拜、說法聽聞の行事のみ、最も人心に浸潤し、人をして一生磨し去るべからざる感化を受けしむべき家庭内の感化力に至りては、甚だしく缺乏せり。其勢力の根底が政治的と來世祈禱とに存するは、實に佛教の大弱點なり。

二教既に其實力の根底を異にす。其結果の現はるゝ所指を屈するに違あらずと雖も、其の最も見易き者を擧ぐれば、彼には基督教的家庭あるも此には佛教的家庭なる特色甚少し。此を以て歐洲にては如何なるフリースンカーにて、其幼時の印象を止めて敬虔の風あり。彼のゲーテが書きし、オステルの朝に於けるフウストは其好標本なり。然れども佛教にありては此薰陶なきが爲に、教者なる兩親に育てられし兒童は、只傳來の宗旨として檀那寺の信徒として夢死するにあらずんば、佛教否敬虔の宗教態を痴として棄て了る者のみ。今の青年は多

くは此後者に屬するを見よ。彼れの實力は家庭の吹き込みに依りて心底に浸潤したるパエテリなり、此にありては其根底、後生大事なる佛法の信條的、空文なり。佛者の所謂安心とは教條を信受したるの謂なるにあらずや。

二者の此差別は如何にして生ぜしか、此差別は果して二教の根本的差別に出でしか、將又基督と佛陀との感化は如何の別あるか。此等は今此に論ぜず、只二者は共に實力なるも、而も其根底に此の如き差異あるを見來れば、吾人は佛教將來の運命を思ひ來て爲に長嘆息せんと欲するなり。佛者果して此別を承認して勇奮するの明あるか。

(三十一年六月)

日本人の宗教的素質と其將來

日本人は宗教的性質に乏しとは、吾も人も唱ふる所の常套語にして、此事實を根據として、我邦に宗教を排斥せんとする者あり、其反對には宗教の特に我邦に切實なるを唱ふる者あり。此の如き問題の決定は易々に斷じ去るべからずと雖も、日本一般の宗教思想が高遠幽玄の趣を備へず、極めて現世的の範圍に限られたる事は、恐くは公平なる觀察者の一一致する所ならん。國學者が日本神代の神々は人なりといひしは、偶然にも日本宗教の特質、邦人の宗教的素質に適中したるの言にして、日本の現世的宗教は人間の崇拜を中心とし、祖先崇拜と英雄崇拜と相合したる者、常に人心感化の根底動力たりき。佛教者は佛教思想が多く日本の人心を感化風靡したるを説き、吾人も印度の幽玄なる思想は日本佛教の高僧に依りて咀嚼同化せられたるを認むるも、而も佛教が日本に入りて蒙古のシヤン佛教、西域の占星佛教と同一一般、極めて現世化せられ、法身觀の談理は報身淨土の渴仰に打ち消され、大日説法の玄談は全く現世祈禱の方便となり、了りし事實は、之を認めざるべからず。

少くとも一般人民の宗教が極めて現世的にして、其理想が甚しく一時的なるは蔽ふべからず。固より何れの國にありても、一般國民の思想信仰に高尚幽玄の談理を期すべからず。日本の宗教が人間現世的なりといふを以て、之を褒貶し、或は此特質に基きて我邦宗教の將來を描摩せんとするが如きは輕率の至なり。然れども日本の宗教、道德は何れの方面より見るも、人物崇拜的のプレチーなる性質あると共に、浮浪暫停にしてペテーなる事實は拒む能はず。大悪人もなかりし代りに大善人もなし、岩長姫、舟虫の如き者が悪女の標本にして、二千餘年の間一のジャンダーク現れず、時平が姦人の最にして、菅相丞は其反對の極なり。俊寛の如く都をこがれて鬼界が島に終りし憐れの説はあれど、フレンスタインの如く運命と闘ひ戦て倒れし悲壯は稀なり。即大に迷ひ大に煩惱罪障に陥りし人なきと共に大に悟りし人もなし。迷て悟りし者文覺あり、蓮生坊あり、西行あり、長明ありと雖も、其迷も悟りも共に微小にして、一時の感動、壯年の不平は其動機、嘯風吟月或は念佛隱

接は其悟の結果なり。聖アウグスティンの大懺悔終に見るべからず、龍樹の大惡大悟八宗の祖となりしが如き者片影だになし。所謂名僧知識は多くあり、而も多くは大に迷ひ大に悟りし人にあらず、大抵皆孤兒となり寺院に入り、師に就き業成り、弟子を感化せしのみ。吾人は日本の宗教及道德の歴史を可憐清淨として愛す、而も雄大崇高として之を尊ぶ能はず。

然れども翻て我邦宗教の盛大勃興の跡を見るに、現世的人間の宗教の國民にも、尙熱情勃興思想崛起の時はありき、多少大に悟り大に善に超絶の理想に動かされし時運はありき。疫癘災異に遇ては大物主神を祭り、瘟疫の行はるゝに際して蕃神國神の争をなせしが如きは事餘りに小にして幼稚なり。平安朝の大宮人が他かぬ現世の快樂に歡樂極つて悲哀多く、一向に無常轉變の福音に歸向せしは事浮遊に屬す。而も大に迷ひて大に悟るの片影は此中にも現れたり。奈良朝の佛教興隆は、三韓外交の失敗と近江朝廷の滅亡とを承けし時にあり。藤氏

の天理に背ける盛運衰へ、平氏の暴興幸運も東の間に消え失せし其時には、源平盛衰記、平語の幽遠なる叙事詩あり、淨土佛教も此時運と共に興りしを見る。其後禪道の流行、大平記の出現は、鎌倉、足利時代の罪惡に伴ひたりき。弘安の役に當りて一時國家的意識と共に宗教的意識の勃興せしも、亦著しき事實なりとす。元龜、天正の間鬼は武士の理想にして、人の國を亡ぼし人の子を殺す者は好き弓取なりし時代に當りて、禪も其他の佛教も著しく活動なかりしは寧ろ奇とすべきも、ジエヌイト教が一時人心を風靡したるは、大に迷ひし人の悟を求めし發表にはあらずや。

斯く觀じ來れば、無邪氣に可憐、ブレチー、ペターなる日本の宗教道德史も、大に困り大に迷ひ大に罪を犯せし(勿論比較的は大に)後には、又大に安立を求め大に悟り大に懺悔せんとせし跡を示せるにはあらずや。之を近時の一問題たりし歴史畫題に見よ、繼信最後の平和寂滅の趣ありて崇高の風なきに反して、延元帝御最後が如何に(若し妙手に書かれ

たらんには、悲壯幽玄なるべきかを思ひ、後徳大寺左大將が一片秋愁の畫題なるに引き換えて、大原御幸が大に深奥の悲哀と安立とを現じ、一層進で、戦後の檀の浦が如何に宇宙的に心情を感動すべきかを思へば日本の歴史、日本人の性質には、必しも大に迷ひ大に悟るの素因根底なしといふ能はざるを知るに足らん。否此の如き傾向若くは需要が、其歴史の時々に見したる事此の如し。然らば日本人の宗教道德がブレチー、ペターにして、宗教的幽趣に乏しといふは、所謂性格素質の必然的不變性にあらずして、實は其の境遇の然らしむる所、海中に孤立して激烈なる國際的經驗を経ず、國土富有に天然の恩恵多くして、眞に深刻なる社會の辛慘を嘗めず、道德に於ても大に迷ひ大に犯すに至らず、思想信仰に於ても大に疑ひ大に求むるに至らざりし結果ならずとせんや。若しも之をして大に迷ひ大に疑はしめば、大信仰大豫言の其の間に出づるは期し難きにあらず。順世外道の極端なる物質主義なき處に、佛教の眞正の道行を求め、追放流離の經驗なき人民に猶太の豫言者

を望み、中世歐洲の暗黒なき國にダンテのインフェルノを見んと欲する能はずとすれば、我邦人が宗教的發達の貧しきを見て此性永く換ゆる能はずとするは、輕卒にして、又將來の時運を豫言指導するの道にあらず。

此に於て我邦宗教の將來に關する切實の問題あり。日本國民の境遇及其社會狀態は、永く其宗教及道德をして從來の如くプレチーにしてベテーに持續するを許すべきか。國民の道德は其をして惡の懺悔の要なきと共に善に奮進するを要せざる程に、永く無邪氣清淨且簡單にして進み得るか。

此問題に對して誰か然りと答ふるの勇氣ありや。今や世に政治、教育、宗教、公德あらゆる方面に關する慷慨的批評を聞く事頗なり。又從來見得ざる悖德陰謀も將來續々生じ來るべし。總て社會の事物が複雑なるに従て罪惡も陰險に赴くは、歐米の實例に徴して明に從て又生活の困難、生存競争の激烈、總て其程度を増し來るべし。况や又東亞に

は妖雲常に天の一方に霞き、國家的意織の必要と國際的手腕の經驗とは益す増加し來るべし。社會問題が既に陰々の勢力となりつゝあるを見ずや。公德問題が盛に識者の頭腦を刺激しつゝあるを見ずや。此等諸問題の解釋は今の論題以外なり、故に言はず。只此の如き社會の大勢より觀察すれば、道德の敗腐といひ、國家隆運に關する掛念といひ、悲觀的批評家のいふ如く、固より悲むべく慨すべき者多しと雖も、此等大勢は即國民をして大に犯して大に悔ひ、大に迷て大に信ぜしむべき、糾細微妙の契機ならざらんや。

特に從來は殆ど邦人の經驗に入らざりし社會問題は、工業時代の大勢と共に、切迫して我邦社會に一大惱亂を與へんとしつゝ進めり、之を壓抑せんといふは、赤手潰堤を支へんとする者のみ。苟も國家の進歩を庶幾する者は社會問題を壓抑せずして、之を解釋せざるべからず。而も解釋は一朝一夕に簡單にして終るべきか。其解釋に至る迄には尙激烈なる過渡に遭遇する事、亦吾人の覺悟を要すべし。况や其問題

の經濟的社會的解釋が進行すると共に、之に伴ふ道德、思想、信仰の苦悶、動搖も亦十分に臍を固めて之に處する覺悟なかるべからず。兎に角日本人は此より益す進て難關を切り抜け切り抜けざるべからず。此時に當りても(今日は既に其序幕に入れり)日本人の宗教的、道德的意識は斯くブレチーに又ペテーにして終るべきか、又終り得るか。大苦悶、大健闘なくして、大理想、大信仰の時代に到達すべきか。

此問題に對して、然りと答ふる人は、白痴の外になかるべし。然らば日本人の宗教心は、所謂其素質性格の如何に係らず、從來の如く輕妙、閑雅の域に安んずる能はずして、其成功の如何に係らず、兎に角大に迷て大に信ぜんと努力するの時至らん。是れ必然の勢なり、恐くは烟眼の士は現今の狀態に既に其機を察せん。

人工的因習的の稱呼ながら、所謂第十九世紀は十日の後に終り、時針の一轉は、夢の如くに望みし第二十世紀を齎し來らんとす。二十世紀以後にも、日本の宗教道德は尙ブレチー、ペテーの特色を特續し得べき

か。

(三十二年十二月)

十九世紀最終の基督降誕會

廿五日の基督降誕會は數日の後に來らんとす。第十九世紀最後の降誕會として、基督教徒の此に對する感慨如何。回教は其紀元十世紀の終に豫言者出づべしと信じて大動搖を呈したる事ありき。將に二十世紀を迎へんとする基督教徒は何故に此の如き豫言的大運動を起す能はざるか。遮莫戦争後四五年にして既に當時の榮辱を忘れ去り、太平謳歌に餘念なく、僅にベストの襲來に驚かざるゝ如き、ペテーなる國民の一部分としては、今日の日本基督教者に多きを望むべからじ。只十九世紀最終の降誕會に際して、彼等の一人にても起て大に振ふの人なきか。敢て促す。

(三十二年十二月)

臘八成道會

臘八に際して、二千四百年の古釋佛が伽耶の寒村、菩提樹下に惡魔を平げ盡して、明星東天に閃くを望み無翳の大悟に入りしを追想す。

斷有大海流　生死永已除　不復受生

の大覺悟發して、多人の爲に憐愍を生じ、多人をして安樂を得せしめん爲に、四方に初中後善の法を宣布し、義微妙具足無缺の道を傳ふる大慈悲となりし昔を思ひ、翻て其末流二千四百年の佛教を見れば、吾人は釋迦の爲に又今の佛教の爲に大息を禁ずる能はず。

所謂公認教運動といひ、宗派分離管長別置の騷擾といひ、彼處には本堂再建の資金を争ふあり、此處には本堂燒失の灰燼を賣て遊蕩の資に供する管長あり。否多言するを須ひず。

彼諸世間五慾等　如猛火坑毒藥函　往昔已來早辭避
既飲甘露智慧水　自心覺了欲覺他
の言を記して、臘八成道の古を忍ばんのみ。

(三十二年十二月)

復活の曙光外篇終

附 録

「復活の曙光」の批評について

猶如有人、身被毒箭、毒箭故受極重苦、彼有親族、憐念……求箭

醫、然彼人者方作是念、未可拔箭、我應先知彼(射箭)人、如是姓、

如是名、如是生、……我應先知、彼弓爲柘、爲椶、爲椶耶、……

我應先知、箭鏑爲錐爲矛爲鋌刀耶、未可拔箭、我應知、作箭師如

是姓、如是名、如是生……耶、彼人竟不得知、於其中間而命終也。

(中阿含箭喻經)

「復活の曙光」の批評について。

著者

小著「復活の曙光」を發行してから已に半年餘、世間が幾多の注意を以てこの書を見、思想家、批評家で之を論評せられた人も少なからず、又讀者でその所懐や疑問を送つて、著者に奨励と注意を與へられた、その好意に對しては、深く感謝する所である。今五版を發行するに當て、少し足らざる點を補ひ、並せて批評の二三をも讀者に紹介し、又之に答へる事にしやう。但し立脚地の全く異なる意見から出た批評、例せば、田中喜一君の「丁酉會での評論や、田中治六君の「新佛教」での批評(それとはいはずに)の如きは、根本からの論究を要するから、別問題として、こゝには著者と多少近い見方からの批評について述べやう。

第一、神祕の語義。著者は總て我等の感覚を刺激し、思想の中に現はれる現實の中には、口耳や或は概念、理論に斯へるより以上の意味を見る性能が人類の精神に存在してあるといふ事實(この事實の詳細の研究は別に譲て)がある事を根據として、この消息を「現實」に對して「神祕」と稱したので、この論點は簡單ながら本書の中に明かにしておいたのである。然るにどうした事が、批評家の中には「神祕」の字義或は聯想に拘泥してか、之をスエデンホルムの現實を離れた神祕と同一視する人もあり、或は神祕とは形も色もない幽霊の借仰であるかの如く云ひはやして、著者を冷評した人もある。此種の批評は古來の神祕家の或る者が現實を離れなければ神祕の境に入れない様に見たのを聞いて、神祕の文字から直に聯想して、著者の神祕をも此と同種類と

見たからであらう。然しながら著者は明かに讀者并に批評家に對して、自分の所解「神祕」が此の如く現實を離れ、形色を無視する者でない事を斷言し證言する。この點は本書の中至る所に説いて、「現實の中に」「現實だけてない消息即ち精神交通の根底」を見るのが即ち神祕であると云つておいたのである。(特に五八―五九、六六、七七、一四八―一五〇頁等)。而して此の如き神祕は著者が勝手に呼んだ名でなく、古來の神祕的思想家のキーターの言を讀者は何と見られたか。總ての中に神を見、「神の中に」一切を見る「是れが印度神祕の大本で、サマニシヤドの中にある如く「我れの中に、我れの方で、眞の我れを實現」する、その「我れの中に」といふ事は又佛教の自燈明の理想にも現はれておるのである(著者の正書「現身佛と法身佛」の一七四―一七五頁參照)。而して此は獨り印度思想のみでなく、キリスト教の中でも、第二にヨハネ傳の著者は「肉となつた靈」のロマス、現實の神人を救主と仰ぎ、大エクハルトの如きは、現實に我々自身の中にキリストの憐れみとキリストの信を得るのが、即ち信仰の神祕である事を説いて、それを一生の福音にしたのである。獨りエクハルトのみならず、キリスト教で父と子と聖靈と三位一體で、三にして一、一にして三と信ずるのは、現實を飛び離れないで、天父とキリストと聖靈とを信仰の中に現實に得たならば、その現時的信仰の中にはこの三人格が一體として活動するといふ宗教的見方から出た教理である。キリストが「神で又人」である事も(六八―七〇、一四八―一五〇)同様、現實肉身の、歴史上のキリストの人格を離れずに、その人格の中に神と人と同時に十分に活動しておるを信じ得るから、之を神人の神祕といふのである。之に反してキリストは神で、その肉身は影であると思つたドクタムは教會から異端として排斥せられたのである。然れば多くの批評家が「神祕主義」と稱して、著者の所謂「神祕」と混同しておるのは、神祕を極端に天上に持ち上げた二三の方外な神祕家の「神祕主義」の外に「神祕」のない者と見た偏見から出たのである。此の如き偏見は思想の歴史を無視すると共に、又現實の中に大な

る神祕を見ない狭量から出るのであるまいか。著者は反復して明言する、「神祕」は現實を捨てた處に現はれるのでなく、現實の中に「神祕」を見るのが即ち美術又宗教である。形色の中に美はある、肉の中に靈は現はれる。此の「神祕」が主義になるとかならないといふ様な事は末の末の議論である。

第二、表象の語義。神祕に次いで、藝術家の側からは「表象」といふ事を好まない人が多いらしい。然し此の點は、根本の「神祕」が現實の中に現はれる者であるとすれば已に十分の説明を経たと同じで、著者は決して影の如き繪、空想の作を以て表象とする者でない。表象といふ語に語弊があるかは知らぬが、「天然の模倣」の中に、その耳目に訴へるのみの現實以上、神祕の消息が吾等の精神に訴へる、之を表象と稱したので、恰もラスキンが影の如き空想 Envy に對して、天然に忠實で、而も直接に活躍に吾々の精神に訴へる或る者を描き出だす才を Imagination と稱したと同じである。表象といふ語が悪ければ、ラスキンの意味の Imagination と稱して、著者には差支ないのである。然し既に之を「想像」と稱して本書中に用ひたれば、批評家は又必ず「現實を重んじない想像」だと非難するであらう。ラスキンがその Imagination の説明の爲に大きな講義をした様に著者も又段々に著者の所謂「天然の模倣で出来る表象」を説明する爲に勉めて居るので、その要點を本書第三章に述べたのである。その草を精讀せらるれば、表象に對する積合の非難も消滅しやうと信ずる。若し川語が不當とあれば、批評家は之に代はるべき適當の提案をしてほしい。用語の一端に拘泥して著者の述べてもかかない、又主張もしない藝術觀を著者の上に附加しようとするのは果して當を得た批評であらうか。然し著者は本書第三章の叙述だけで満足せず、現に「時代思潮」で時々その説明をも施しておるのである、又本書の續篇「美術の復活」で十分之を説明し叙述する心算である。それまでの處は第三章の叙述を能く見ていたいただきたい。著者は決して形色なき藝術美を主張する者でないのである。

第三、神とは何ぞや。この點は多數の讀者が著者の宗教を説くに對して失望したといはるる點であ

る。然し著者の主意は、神とは斯く／＼の實在である、神は斯く理會すべき者であると云はないのみならず、
 一步進て此の如き説明理會で宗教の能事を終つたとする見方を破しようとするのが著者の勉めた所である。此
 の如き説明理會は信仰の大本が立つた後の附加説明であつて、此の如き神學說の存在する事は悪くないにして
 も、世間は往々此の如き神學說を以て宗教とし、神學說が成り立てばそれで宗教が出来たと見る、それが冠履
 顛倒であるといふのである。キリストは天の父の愛を信じてその宗教の感化を布いた、然しその天父は、「天に
 在せる我が父」、「今日野にありて明日は爐に投げ入れられる輩をも此くし賜へ」るその愛を信の中に體得する
 といふ外一點の説明も理論も加へなかつたのである。而してキリストの宗教の實力はこゝにあつて、決してか
 の神學に存しなかつたのである。佛教でも亦同じで、メーリ語のウターナ(入の一)に次の句がある、

To ca appa pi sutvāna, dhammāni kāyena passati,
 sa ve dhammādharo hoti, yo dhammāni nappamajjati.

(少く聞くと、身にて法を見る人は、

法を有する人となり、法を捨てず)

所謂「色讀」の一語は信仰の大義を盡しておるのである。それ故に佛陀はその大本の法や又理想の涅槃を脱
 明せず、直に如來に對する信の中に之を色讀せしめんとしたのである(此點現身佛と法身佛「一五一—一五七
 頁參照)。孔子の仁を弟子に教へ、孟子が浩然之氣を説き、陽明が工夫を教へたのも要はこゝにあるのではない
 か。吾々はキリストや佛陀の神人に神性の體現を見たなれば、その人格を信じ、その人格を自分で得て、そこ
 て自分の中に神を實現色讀すべきである。宗教の信は神人を信じ、自ら之に同化して行く點に存する。先づ神
 の性質、實在の狀態を論究して後、神人を考察しやうといふのは宗教に反對の方向で、此は神學或は哲學の能
 事である。實在とか神とかを知らう、その何たる事が分かる様にしたといふと望まれた讀者が、本書で失望せられ

たのは著者の本望である。此は恰も法華經の文字を讀てその教理が分からうかと思つて失望すると同じである。
 然しながらその失望の反面に、著者のいふ宗教、神人色讀の趣旨が讀者に徹透しないとすれば、此は著者の足
 らざる點でもあらうが、又多くの讀者が、大本から宗教を哲學或は學問と同一視してかゝつた爲であるまいか。
 この點で失望した讀者は、著者の如き人物の書なによりにせよ、心を凝めて直にキリストの山上の朗誦なり、
 或は佛陀の嚮來經(中阿含雜經)なりを色讀味讀せられん事を望むのである。然しながら著者は及ばずながら、
 此の色讀味讀の手引きだけは多少本書で與へたつもりである。若し虚心で本書を見られたなれば、本書の中に
 も多少の光明はあらうと信する。又「美神の復活」に次いで「聖靈の復活」を世に公にする日には幾分か讀者の力
 にもなり得やうと望むのである。

本書に對する評論類二二三

その一、芝區田中南甫君書簡

復活の曙光は實に一世の警鐘なり、復活の號砲なり、神祕によりて科學と藝術と道徳と宗教と而して人生と
 を解釋せらるゝ處卷を捲ふて眼を閉づる時天上に聲を聞き、心裡に光を見て神感油然而として胸中に湧く、
 而して甚だ燃むらば一篇の主題たる宗教と人生なる最後の一章に至りて、生等が深く胸中を閉塞せし圍々た
 る疑雲、此の章によりて始めて撥排せらるゝを得んと待ちし希望は、遂に満たされずして巻を閉づるに至れり、
 然りしか今先生の袖にすがりて高教を仰がんとする疑問は先生の此の著に於て釐と其の説明を避けられたるも
 のにして、少くとも此の著述の原意の外にあるものなる可し、
 然れ共先生の唱道せらるゝ神と人との愛、即ち道徳宗教を産み出す此般の神祕を味ふて人の人たる所以を完ぶ
 するまでに至るの最初第一歩に於て、此の精神交通の行はるゝ靈性の門を開く可き鍵鑰たる「神を父と呼ぶ」

に至るに必要な條件にして此の條件が先づ決定せらるゝに非れば世人——少くとも、生、及生と同じく淺學
 塵味なるもの——は先生が唱道せらるゝ神祕を味ふこと能はずとすれば、先生の著述に因つて、此の條件の決
 定即ち我が靈靈の變非を膝下に跪いて先生に乞はんとするも強ちに木に竹を繼がんとするの類には非ざる可し、
 今生が先生に高教を乞はんとする所のものは、先生の著書に於て吾人に教へられたる精神交通——人生の神祕的
 生活——よりは、より遠き問題ならん、神と人との愛が人間の活きたる事實たるに反して、此の問題は死したる空
 論なるやも知る可からず、極端に言へば不可知の境を摸索せんとする徒勞の空事たるなきやを恐る、故に先生
 或は避けて此の問題の解決に向て先生の高説の代りに神學の研究を以て生に推薦し給ふやも計る可からず、若
 し此の如きに至らば失望何者か之に加へん、
 是れ生が敢て道徳の問題を提出して先生の高教を仰がんとするの前に當りて斯く贅言を費す所以なり、先生請
 ふ諒せられよ、

美術に神祕を味はん爲めには、先づ眼を開いて之を觀ざる可からざるが如く、宗教に神祕を味はん爲めには
 先づ吾等が靈窓を開いて神來の光明に接せざる可からず、而して人が滿腔の同情同感注いて神の無限の愛に
 居らんとする所以のものは實に神人の合一、即ち吾等の靈性が發展して神學上の所謂原罪、及び現罪の無明を
 斷じて絶待の大我に歸入せんとするの無限の希望ありて此の希望が神なり如來なり的大力によりて達せられ得
 るとの確信が立つに至りて始めて、無限の歡喜と不動の安心とは胸に咲い、滿腔の敬愛は心に湧いて「神を父
 」と呼ぶに至る、故に此の希望と此の確信とは愛と同時に生る可きものなれ共、却りて愛の前驅となりて愛よ
 り先きに現はれざる可からざるがべき觀あり、(少くとも生一人は此の神の力を信じたる後に非れば神を父と
 呼ぶを得ざるなり)
 されば、先生が吾人に教へられたる宗教的神祕生活に入らん爲めには先づ神を父と云ふの愛を起さざる可か

らず、而して神を父と呼はん爲めには、神が人を神と合一せしめ得る力を信ぜざる可からず、故に先生にして
 此の信仰を最初に與へ給はずんば、神祕生活が如何に人を完からしむるものなりと雖、徒らに人は先生に、藥
 の効能を聞いて而して飲まん欲して飲むを得ざるの大苦悶に陥らん、
 教會に赴かんか、僧侶は吾人に説いて曰はく、信仰は事實なり、神祕的經驗なり、兎も角之を信じて之を経験
 せよと、聞けば實に尤もの次第なり、されど先生が其の著に於て論ぜられたるが如く、人の生命には活きたる
 理性の要求が發洩として働ありて、信仰はたとへ經驗より來れる事實なりと言へ、此の道徳的信仰の下に
 此の理性を自殺せしむるの苦痛に堪へざるなり、

既に靈的生活に入りし者の身は六塵の娑婆に沈みながら心は無限の空高く理想の境に優遊して神月露水に寫り
 て感應したるの状態は物質學者の得て何ふ處に非る可し、隨て物質萬能の十九世紀以來の人心が甚だしく心
 を傾くる處にも非る可し、是に於て先生起ちて先生専門の學術たる神祕によりて是を説明し靈的に亡びたる吾
 が國民に復活の曙光を望むの榮を嘉み給へり、生等感泣措く能はず、先生の恩寵に浴したるを喜ぶ、されど、
 龍を得たる吾人は更に龍を望むの止むを得ざるなり、抑、先生が其著に於て説明せられたる深き問題は吾人
 が先生に待つ所としては餘りに淺かりき、而して又世人が宗教の門を窺つて遂に其の堂に登るを迷らるゝ宗教
 的疑問もまた、此の深きよりはより深きを信するなり、されば靈的に死したる國民に眞に復活の喜びを恵み給
 はんとする御意を更に延長して次に掲ぐる問題に向て先生の信する所を教示し給はんとを切に願ふ所とす、
 一、神が人を救ひ得る力、

人は原罪と現罪とに縛されたる囚徒なり、八十八使、見惑の志執に迷はされたる凡夫なり、吾等に精靈の迷ぐれ
 ば大我に歸し得る眞性はあれど、吾等の無明が斷せざる限り、吾等の罪が亡びざる限り、神境は何處までも神
 境にして、凡夫は何處までも凡夫なり、生佛一如とは理論の上、差別界にある吾等は遂に神人の障壁と徑庭と

を消亡すること能はざるなり、而も神は、煩惱を断せざる吾等に直ちに涅槃を與へ、想像に於ける能はざる、理想境を與ふる吾人に體得せしむ、而して吾等が、此の罪と無明とは如何にして無くなるや、神は如何にして之等を無くする力を得しか或は力あるか、

二、救はれる人の愛、

神に對する愛は一片の感情のみ、若したと神と交通する、罪の儘の人としての、神祕生活の爲には愛のみにして十分ならん、されど宗教の靈能と吾人の靈的要求の極致とは單に神祕生活を營み得る人となるのみに非ずして、究竟の神人合一にあり、而して神祕生活せる人と、神人合一の境と甚だ遠きにも拘らず、吾人は單に一片の感情たる愛の眼を開くのみにして、些の行爲人格を向上せしめず、而も克く地下の吾人が直ちに天下の理想を体得し得るや、若し斯のとくんば眼之を視たるのみにして足を運ばず、而も能く身を遠きに致すと吾ふ如きのみ、

若し但に愛の關係のみが神人合一の徑路とすれば、善も惡も仁も不義も、絶待の救の前には五十歩百歩となりて、自修奮闘して人格を向上せしむるが如き層々たる迷界の些事は絶待の前には其の要なる可し、たと、祈禱是事として愛の關係を深ふるを以て宗教的能事は足らん、

之に反して救の爲めに徳を積み性を整へて修練工夫、此の小我を擧げて彼の大我に没入せざる可からずとすれば、人間としての道徳、修養にては殆絶望なり、

若し愛と行とは並行す可きものなりとすれば今日教界に於ける事實の許さざるを如何せん、たへと之ありとするも、人の性格行爲には階級あり、上下あり、此の上下は救の上に如何なる状態にて置はるるか、若し救の上には無上下平等なりとすれば、善も徳も救の前には一文の價值を見出さざる可し、

三、神人合一したる後の状態、

是は人間の思想と言辭とに投寫し得可からざる色彩ならん、されど唯だ模糊として雲の如く霞の如く、無耶有耶の境に想像するのみにて満足するは、人間の理性が麻痺せる爲なり、体達したるものに非れば其の眞境を知るに由なきは勿論なりと雖世に藝術の滅びざる限りは其の近似値を盡き來りて人の要求に幾分の満足を與ふるは藝術の莊嚴なる光彩にして又人に負ふ義務なりとす、寂滅無活動か、還來利他か、耽樂か向上か、若し不可測不可知を以て檢抹せんとせば勿燃盛なる吾人青年は遂に入門するを得ざるの不幸に陥らん、大乘の三身、小乗の無餘涅槃、既に灰かに其の消息を傳ふるに非ずや、父なる神に投合したる後の状態豈不可説を以て人の理性を迫る可き理あらんや、

四、死と神人合一との關係、

人にして神人合一することありとすれば、そは此の生命ある中に非るは勿論なり、然るに死とは如何なるもので、神人合一の途端か、神國に入るの門か、死と神人合一に徑路ありとすれば其の間の状態は如何、四方淨土には九品階級次第昇進の徑路ありと聞く、如何に時處を超越せる靈界の事なりとは言へ、若し徑路ありとすれば其間の有様を説明せざる可からず、若し死即神人合一とすれば死と言ふ生理的變化が、人を煩惱より解脱に導き、凡夫より悟者に變ぜしむる不思議力あるの理如何、

死とは如何なるもので、

靈的生活に入りて天の慧光期に心靈々裡に輝ける人にとりては死は靈が肉を離るゝの現實なる可し、然るに宗教の生命に入らざるもの、悪人、白痴等、凡て神との關係なきもの、死後の状態の如何、天國に入りて永生を得るの一方面を脱かば必ず天國に入らざるもの、始末を付けざる可らず、

人あり、父なる神に逢はしめんため、母なる、教會に人の手を導けり、子たるもの歡喜踴躍一流の紫電に心内の闇を破られて光雲に乘じて母の側に至る、既に教會の門に望むや、導きしものは辭して靜に去れり、子茫然

として門内を見れば光を奪ふ闇、闇を奪ふ光、錯雜往來して疑懼胸に迫る、大聲交に哀を求めんと欲すれども呼ぶ聲なし、子たるもの、失望もまた、此に至りて極めりと言ふ可し、先生の復活の曙光を著さるゝの、宗教の信を、神祕を以て説明せられ而して此の神祕的生活に入りて人の人たる所以を完ふせんことを教誨せられたるに外ならざる可し、然れど先生が此の書の感化力の大きな讀むものとして愛の金鈴が天空に鳴るを聞かす其の妙響の赴く所を道はしめて遂に失望の深淵に陥らしめたり、是れ先生が豫期し給はざりし處なる可しと雖者者の力は竟に先生の自認以上に大なるを如何せん、先生が教へられたりし神祕的生活の光明には生敬んで之に接せり、而して此の靈の生活に入らんとし神を父よと呼べんとすれば上に列擧せる疑懼口を縛て聲を殺せしめず、故に折角入らんとせし神祕生活の門は吾が前に閉されぬ、

故に情を陳じて語んで教を請ふ、吾は飢に苦める求道の青年なり、先生にして若し生に復活の露水を給はゞ腐風生を更へても肥す可きなり、先生幸に諒せられよ、敬白

(著者附記。右に掲げた田中君の疑義は要するに、神の何たるを知らず、どうして之を信する事が出来るかとの一事に歸するのであるが、此は信といふ事を知の結果と見て居らるゝ爲めである。事實上日常の事を知るのにも、知解が先で、後にその者を信するのでない、認識の中には已にその者の實在の信があるの、その聲は背後から来た」と知解するその知覚は後で、その聲その者の存在とその存在の信とが先である。神の事も同様と信する、信と知との先後が田中君の疑問の原因であるから、此點は特に他の讀者にも熟考を煩はした

い。又愛を「一片の感情」といはるゝが、その一片が人の生命を動かすその力の事實は何であるか、一片でも何ても力あればよし、理性はこの力に伴隨する者で、之を左右すべき性質の者でない、信の中には愛あり、愛の

中に行あり、行があつて理性も始めてその職務を盡し得るのである、行は知の成就である、教はれた後の状態云々の疑問に對しては、今は直截に中阿含經の玩味を勧める外ない。

その二、帝國文學十卷二號批評、

姉崎博士の新著「復活の曙光」は近時發刊の著述中尤も光彩あり、尤も感激を興ふるものである。吾人はあらゆる醜美の語を以て之を歡迎し、普れく之を我讀書社會に推薦するを喜ぶものである。

固よりこの書は外篇即ち博士が往時雑誌に起稿された断片論文數十を外にして本體たる部分は僅々百六十頁で、博士にありては少しも餘るに足らない小著述であるが併し含蓄せられたる抱負と理想と主義とは眞に高天國遠のもの、感激感興の中に讀者の注意が唯々無限のあなたのみならず、また知らぬ星の御國に導かれ心地するのてあまりに短き博士が言の葉を恨むのみである、殊に深遠なる熱情と明確なる博識を湛えたる博士の文章なるが上に、一々現代悪文明を批判して悉く其肯綮に中り思はず讀者をして讀嘆せしむる者であるから、寧ろこの小冊子も大著述と云つて致て差支へない。あゝ現代のやゝもすれば親しく西歐の文物藝術の模倣を自撃した大學者先生が徒に解説や翻譯や倫理や論理などと浮身を擡して、吾人が常に其許に隨いて人生問題と心靈問題などと極く手近い疑問を提出して其解釋を求むるけれど節句働き流儀で少しも吾人に挨拶してくれないのに、獨り博士は殊更に吾人の要求に應じて先づ心靈の問題と人生問題に對しての解釋を示して來たのは、眞に吾人は感謝の念に堪えない。あゝ吾人はもう解釋に飽いて居る、この短い生涯を貫ひながらなんて解説を端から端まで日を暮して居られやうか、吾人が直に心靈問題に關してオリソナルの說を聞きたいと願ふのは實に無理ではない、博士は眞に吾人青年の爲めに憂を共にする人で、誠に感謝に堪えない。

本書の本筋は凡て六篇より成立して居る。「人生と科學」「科學と藝術」「藝術と神祕」「神祕と道德」「道德と宗教」「宗教と人生」即ちこれである。博士の說を簡略に述べれば科學も道德も藝術も宗教も、要するに宇宙に

遍在する大我的精神に其根源を置くのである。而して吾等の小精神を没して大精神の中に融合するのが吾人生の意義にして又目的なるべく、藝術こそはこの目的を果すべき唯一のものである。而してこの大精神に吾人の小我の精神が交通する事即ち美的優遊は神祕とて云ふべきもので、藝術は即ちこの神祕の表現である。而してこの大我中に小我の没する事即ち神祕化は、とりもなほさず愛となりて發表するので、この愛こそは道德の極致で又宗教の究竟である。佛陀の慈悲、基督の博愛もこれに通じない。即ち佛陀が吾等の存在を罪業無明となし、智慧の光明を以て無明の境より解脱して寂靜の涅槃に入るは、即ち小我を棄て、大我の光明を辿り以て神祕の境に入るのである。即ち大宇宙精神に隨着するのである。又基督にありては吾人の存在を直に罪と觀じ、佛陀と同じく愛と信との意識即ち知を以て之の罪を滅して神と一致すると説いたのも亦小我を棄却して宇宙に融合するのである。神の愛は即ち神の知で、確信確認はとりもなほさず吾人を大精神に結合するのである。此の如く博士は道德宗教藝術を以て小我を脱して大我の精神の根底に入る吾人が心靈的要求の同一發現なりとするのである。

又博士は宗教にありても藝術にありても必抽象的にあらずして實現的の表現を要すると説いて居る。而してこの表現は「天然の模倣」即ち眞の寫實で、即ち大神神大精神を示す爲めの配鏡に過ぎないのである。故に宗教にありては人格的佛陀と基督とは直に大精神なる愛の化身眞如の木體であり、藝術にありては直に大精神の發現であるのである。そは決して「考へ又活きる形の影」の美術であるべきでない。かくて博士は物其もの描寫を唯一の目的とする所謂寫實主義を駁倒して、眞に痛快を極めて居る。

博士が佛陀と基督の解釋は殊に壯快である。佛陀と基督と共に小我を排斥するに於て一致し、又佛陀の智慧も基督の信即ち自覺も共に知なりとなし、之に依りて大我精神に合するを脱けるは其順序と踰越とを全然一なりと論議したるは眞に博士の卓見である。現今の如き佛教の人は基督教を知らず、又基督教の人は佛陀の教を

知らないで、お互に信條や又は在來の約束に恐れて相罵り相笑ふが如きは、凡て吾人心靈の要求を知らざるに坐せるもの、吾人より見れば眞に片腹痛い次第である。予は切に現代の宗教の人々は是非とも博士の説に傾聴せむことを願ふのである。

最後に博士の科學も藝術と根底を同うするので、即ち大我的精神を現實せる物質の世界に見出すのであるとなしたのは、實に吾人在來の思想の、誠に卓見である。博士の云うたやうに大なる理學者は實に大なる哲學者で又大なる神祕家である。決して世人の思ふが如く定理と公式にて眞理を發見しうるものとは信じて居らぬ。空想と憧憬と信仰とは即ち其思想の根底であつて、全く詩人と想を同うして居る。唯對象を異にするので一は言語と情感を借り、一は物質と自然物を借りて共に大宇宙的精神を歌ふのである。有名なる地質學者クリン博士が『世界の構成』と云ふ小冊子の序論に詩人は理論と解釋を待たて直に科學者の考究して求むべき斷定を奪むものとなし、詩人を以て科學の先驅て又豫言者なりと讚美した。又以大和の哲學者、シムペリはケオレン、ニエートン等は皆理想の人であつた。空想は實は科學者の第一義であると云ふて居る。博士の言は誠に名論である。是非今日の公式と法則を唯一の科學の目的と信する科學者先生の一讀を煩はして其科學に對する觀念を改めてもらひたい。『復活の曙光』は絕對に吾人の眼裏の已まざるものである。併しなにしろ小著であるから吾人が年來藝術に對して持つて居た疑問は之を精讀しても釋然氷解する事出來ないものがある。他日改めて詳細に博士に具陳して意見を伺ひたいのであるが、行き係り上、讀者諸君にも吾人の疑問を呈出して見よう、これは慥らくは一顧の假もなく、大方の人々の慨笑に値するかも知れぬ。

(第一)吾人の心靈は大我と小我との融合、即ち小を没して大我的宇宙精神に合するを理想とすると云ふが、博士の説によるとこの大我的宇宙精神は千載一様で、永久變りなく遍在するやうにも思はれる。吾人の疑問は此處である、思ふに吾人の心靈は反對に小我を脱して無限に未知の天地に憧れて行くのでなからうか。あちや

る世界を統一して所謂大我的精神とならむことを欲するのではなからうか。即ち吾人は思ふ、吾人の心靈の創造力は無究竟である、何處迄行くか底止しない。一言すれば大我と交通するのてなく、大我的精神に滋養するのてある。即ち大我精神は初めから一定して世界に存在するに非らず、吾人の心靈が發展して創造するのてある。

(第二)科學者が自然の中に大宇宙精神を見出すと云ふけれども、吾人はむしろ吾人の心靈に一切のものを受けて、吾人の心靈に湛ふる理想をばかの自然の一切のものにて説明するのではなからうか。即ち自然に現はれたる理法を見出すにあらて、我等の心靈はこの理法を作り出して自然と宇宙を以て之を説明せむとするのではなからうか。

(第三)博士の如く大我と小我とを是認する時には、かのフュロテが所謂意志の活動と大我との關係は如何に説明すべきものなりや。吾人の意志活動はそも何であるか。何故に吾人は基督の意志の活動そのものを體美するか。即ち吾人は彼の愛の方面即ち大我中の融合を限りなく體美すると共に、彼の活動も亦吾人を救ふべき唯一の光明であると思ふのである。

(第四)博士は「考へて居る形の影」なる美術は眞の者ではないと云はれたが、吾人は私に思ふのに、大衆佛具の詩的創造や又我國天平時代の佛像彫刻などは明に「形の影」ではなからうか。吾人の經驗上、此の如き抽象的理想的理想美術をも汲仰し體美するは疑ふべからずである。試に梵天像を見ても男か女か解せられぬ超絶的表相を以て居るではないか。まことにこれ思ひと考へと寫眞と模倣とを絶したる美術ではなからうか。しかしこれは眞の美術でも何でもないと云はるればそれ迄の事であるが、なにしろかゝる美術を人生が要求する事は疑ふべからざる事と思ふ。

(第五)博士は美術の表現は常に大宇宙精神を示す者であると云はれたが、吾人はいつてもこゝに到る毎に、

何故に吾人の心靈は具象的表現を要求するやの疑問が起るのである。小乗のやうに又基督の行爲と教義のやうにたゞ信念と觀相と冥想によりて吾人は尙大我的精神に没入する事が出来るのである。しかるに何故に吾人はこれに満足せずして更に具象に大我的精神を發現せむば已まぬのであるか。何故に釋尊は大日如來阿彌陀如來となりて、無上の人格となりて現はれなければならぬか、何故に基督はしかく偉大なる人格として明に具象的藝術的の性質を帯びて、吾人に認識せられなければ止まぬのであるか。この問題の解せられぬ中は藝術は吾人心靈の最高の職能であることは解するに苦しむのである。

吾人のこの書を読むて思ひつきたる在來の疑問はこんなものである、がとにかく本書の吾人に慰藉を與へ、多くの疑問を解釋して大なるあるものを與へたるは實に浩大なるものである。吾人は眞に感謝に堪えない、吾人は之を普く人々に推薦して以て博士に對して感謝の一分をも表する標とするのである。(野の人)

(著者附記。批評の第一、第二の點については、評者はこの我が發展して大我となるといふ根據に立つて居らるるが、その「發展」の一語の中に、如何なる消息が伏在してあるかを一層思惟してほしい。第三の點で、著者は固より「活動」を以て「愛」の自然の結果否同伴と信じ又主張する、この點は道徳の條下、「愛の恰み」の叙説で明かである。第四に、天平美術は何故に影の形であるか、評者はラスキンの Fancy を以て天平美術を律しようとするらしい、然しあらゆる神話や、神話から出た空想は決して Fancy ではなくて Imagination である、著者は近い中にマツツの藝術を論じてこの點を明かにしたいと思ふ。第五の疑問は先に神話と現實との關係について一言したと同じ答へをする外ない。)

その三、東洋哲學十一卷二號批評

頃日帝國文學の巻頭に掲げられたるメルナルド・フロックホルストの「信、愛、喜」の畫を見る。本より一片の寫眞の、僅に原作の面影を忍ぶ便たるに過ぎざるべけれど、其の畫に乗して將に昇天せんとする三人の女性

の風采態度、殊に其の瞳に溢れたる怪しき光に打たれては、身はいつしか陋隘なる居居の一隅に在るを忘れて、魂は彼の三人と共に飄々として現ならぬ世界に優遊する心地し、得も云はれぬ慰を感じたりき。而して、こは正に姉崎博士の近著なる『復活の曙光』を讀みて得たる感じに等し。

平々淡々たる言文一致の行文の何等の奇もあらぬが中に、閑雅温和なるメロデーの溢れるあり、讀みもて行く間に、知らず知らず心は其の諧調の中に揺し去られて、恰も美妙の音楽に打たれたる時の如く、讀める身も忘れ、讀む書を忘れ、恍惚として月光瀰るなる花の間を彷徨ふ心地したるは、批評の訝えたる眼のみにて書を讀まんよとせざる讀者は、誰れしも等しく感じたる所なるべし。余は一讀して尙捨つるに忍びず、夜を徹して二回までも讀み通したり、嘗てカーライルの英雄論を讀みし以來（本より其趣味は甚異れりと雖、其程度に於ては）未だ味はざりし感興を得たるは實に此書なりき。

余謂らく、近時の學者の多くは全く盲なり、聾なり、啞なり、少くとも其一眼一耳半舌だけは確に其機能を失へる不具者なり。彼等は善く主觀と云ひ客觀と云ふ名を知れり、而かも自らの心其者、大自然其者知らざるなり。彼等は宗教なる文字、道徳なる文字を讀むことを得、而かも宗教其者、道徳其者に對して何等の關する所なきなり。彼等は又善く宇宙を云々し人生を云々す、而も其音や吾人に對して何等の感をも與へざるなり。彼等の見るは只名と字との世界なり、彼等の聽くは只教諭の講演のみなり、彼等の語るは全く無意識の音なるに過ぎず。如斯にして彼等は尙完全なる眼耳鼻の機能を有すと稱するを得るか。而して此不具者たる學者の例に洩れたる者、先に高山樗牛氏あり氏は現今の所謂學者なる者の忌み畏れ遠かれる所の者を大膽にも眼前に見たり、身親しく我が大自然に接し大人生に觸れたり、接して而して其粉砕せるに驚けり、隔れて而して其憧憬たるに戦けり、而れども一度接したる以上は之れを解決せざれば止むべからず、一度觸れたる以上は之れを救助せざれば措くべからず、懷疑煩悶の手は彼を捕えて復た放たざるを以てなり。斯くして彼れば八方に是れ

が解決救助の道を求めたり、是れを愛に求めて得ず、酒に求めて得ず、文學に求めて得ず、哲學に求めて得ず、又ニーチェに求めて得ず、日蓮に求めて得ず、恰も新に檻に投せられたる野獸の如く、逃れ出づる道を求めて狂ひつ猛りつ、遂に其檻を破ること能はずして其檻の中に憤死したりしは彼の樗牛氏にあらざりしか、實に高山樗牛氏が一生は暗黒との奮闘なりき、光明を呼ばふ叫喚なりき。親しく暗黒の苦痛を嘗めて光明を求むること知らざる學究の徒、奈何そ氏が奮闘叫喚の意義を解せん、彼等より見れば氏が奮闘は全く無意識なる狂者の亂舞に等しかりき、氏が叫喚は彼の影を見て吠ゆる野犬の聲とも聞えしならん。嗚呼心内には人生最大の苦痛を懷き、身は暗黒の中を彷徨ふて四邊惡魔の嘲笑を聞く、斯の如くにして不平憂愁煩悶の間に亡び去りし樗牛氏が一生は何等悲慘の歴史なりしぞ。古來眞人の愁皆等し、吾人は是れを思ふて毎に泣然たりざるを得ず。而して氏が生前より氏が眞の友人として常に慰め勵まし、共に泣き共に憂ひしは實に姉崎嘲風其人なりき。吾人は姉崎氏が歸朝以來今日まで其亡友の爲めに盡せる所を見ても其愛情の尋常の者ならざりしを知るに足る。其愛の由て來る所を知らずして、豈其の憂に同情するを得んや、姉崎氏亦眞に人生の憂のある所を解する者か、而れども彼の樗牛氏が常に暗黒の裏にありて煩悶叫喚奮闘せしに反して、氏は常に光明の中より身を去らす樗牛氏が光明を認むることあるも猶ほ暗夜一點の星を發見せしが如く、氏が暗黒を見ることあるも尙燈火の中に在りて物の影を窺ふが如し。されば樗牛氏が文には常に沈痛悲壯の調ありしに反して、氏が文には自ら平暢和樂の調あり、樗牛氏は人を誘ふて木枯荒ひ霞亂る、枯野原に迷ひ泣かしむるに反して、氏が文には自らいつしか花笑ひ鳥鳴く庭園に遊ばしむ。是れ蓋し兩者の性格の差異、境遇の不同より來れる結果なるべし。氏其『抒情詩の月』に於て言へることあり。靜なる月の光は柔和なり、朦朧なり、月は限なきのみ見るものかへと云ひし人げに月光の甘き味を吸ひし人なり。月光瀰るる中に徘徊して、人は一切の刺激を離れ外界生活を去りて内界生命の者となり終り、恰も幻化の界にあると同しく又夢の世界にさまよふに同じ」と。是の如き

は實に氏が思想文章の調子なり、氏が讀者をして遊ばしめんとするは此幻化の世界なり、夢の世界なり、氏は氏が所謂神祕の酒に人を酔はしめずんば止まず、氏が神祕とは彼の照りもせず曇りも果てぬ春の夜の月にも似たるかな、人をして恍惚たる現ならぬ境に彷徨せしむ。

氏は曰く「山も波も空も皆我と我心との一部分で、又我は彼等の一部分であるまいかといつたマイロンの名言は享樂にしても創作にしても吾等が美に打たれた時の感情である。此感情は決して根據のないものでなく、却て最も深い天然と萬人の精神とを包括する大なる根據のある感情である。」「現象の中に理想を作り出すのが藝術で、精神の交通に依つて現象を理想化するのが即ち美に憧れる、我等の天性である、人間精神の神祕である。」「吾人が神祕の中に精神を遊ばせる状態は總ての世間の利害得失は勿論、世間の思慮活動を越えて時感因果の外に優遊するのである。此の如き優遊は現世の生活では最もに美の享樂に於て現はれる。」「キリストは人の子の自覺に依て神の子たる實を現はした、彼は人であつたが故に即其生死に依て救はるゝ人の實を示したから、之に依て亦救ふ神の力を現はした。眞に救はるゝ者の標本は即ち同時に救の力である、キリストは此故に眞の人で同時に眞の神である、神人同性は單に宗敎でなくして生きた力である。」「信と愛と是れ二つの者ではない、精神の交感道交から出た人格の融合が愛であるならば、神人に對する愛が即信で、此信に依て吾等は遂に神に似、父と一になれると云ふ確な見込がつけば是れが即望である……それ故に信と愛と望とはつまり三にして一である、宗敎が人生に與ふる最大の又唯一の賜は此三一の徳である。」「哀むべき我身の現在の生活に満足せずして、何者かの偉大なる光明を迫り求めて悶え苦める者、誰れかは讀んで此處に至れるとき我理想境も彷彿として遠きにあらざるを感ぜざるものあらん、氏が所謂神祕も亦單なる實なき哲學上の假名にあらずして實に活ける力なるかな。

然り、氏が所謂神祕とは絶待と云ひ本體と云ひ實在と云ふか如き空漠なる概念にあらずして、直に人の胸底に

忍び入りて生命の顆粒に膈れ、茲に華妙の諧音を響かしむる活ける力なり。纏綿せる外面の繁縷葛藤を脱却して、氏が所謂無朕無象の觀念界に悠々翔躍せしむる活ける想なり。然れども其力たるや、彼の臆胆たる春月の力に等し、能く人を誘ふて夢か現かの世界に優遊せしむと雖、そは人をチャームするものにしてアウェークするものにあらず。又は芳醇なる酒の如し、氏は人をして神祕の中に酔はしむるものにして、人の中に神祕をして醒せしむるものにあらず。酔へる間こそ無碍自在の翅を驅りて、幽幽妙の理想界に優遊する心地もすれ、一たび醒めて身自らを顧みば肉の牢獄に呻吟懊惱せる憐むべき罪惡の子を見出すならん。氏は人を神祕の天上界に連れ行きて、直に又之れを地獄に投げ込む者なり、一たび見たる天上の歡樂は追へども回復すべからずして、身に殘る者は肉欲戰爭恐悞悲、唯如斯のみ、吾人は寧ろ曾て彼の天上界の妙樂を味はざりしことを願はざるを得ず。

如斯は氏が親しく人生の悲惨なる味を嘗めしことなきが其一大原因をなせるなるべし。蓋し氏は順境の人なり、生れて父母の慈愛の中に育ち出て、小學に入り中學に進み、俊秀の名を貢ひて大學を出て、獨逸留學を命ぜられて幾何もなくして、博士號を許され、歸り來りても地位は大學の教授たり、身は第一流學者の姻戚たり、吾人が知る限りに於て氏が徑路は順風に駕して光景明媚なる内海を走れる輕舟の如し、曾て暴風怒濤の難に逢はず、波濤喧呶の中に迷はず、常に風爽にして波平かなり。之れを例へば氏は母の温かなる懷に在りて微笑める知難ある嬰兒なる哉、氏は常に人に語りて吾が如く靜かに和かに温かに安げと云ふ。人誰れか氏が如くなるを願はざる者あらん、然れども酸酷なる運命の波は一葉の生命の舟を翻弄して瞬間の平和をだに惠まざるを如何せん、暴戾なる境遇の暗は四邊を閉して一點の光明をだに示せざるを如何せん。人の罪を犯すも間断なき誓願に堪へ能はざればなり。惡に陥るも晴るゝ期を知らぬ暗霧を逃れんと欲すればなり。古人曰く、泣いてパンを食ひし者にあらずんば人生の味を解せずと、氏の如きは甘きメンの味を解すれども、恐らくは其悲しき味を

味ひしとならん、味はずして奈何ぞ眞に慰むるを得ん。此の宗教は歎める者の戒めにして悲める者の慰めたるのみならず、吾人が日常生活に於ける活動の原力たらざるべからず、吾人が生命の源泉たらざるべからず、即ち人生の波瀾奮闘に勞れ果てし將に倒れんとする人をして、新なる生命と希望の中に蘇生せしむる活ける力ならざるべからず。氏が所謂神祕の如きは、暫く人を夢幻化し去りて幽妙なる愉安を興ふる力は之れありと雖、死者人を復活せしむるが如き能動的積極的の力は之れを缺けり。

是れを氏が脱ける神祕の内容に就て見る時は愈明なる者あらん。氏は近世の唯理主義科學万能主義を以て自分の経験を以て人の経験を迫害し、過去の経験而も偏狭なる経験を以て將來を律せんとするものとなし、科學の職分は吾人の経験や理想を説明し探究するのみにして之れを建設する權利を有するものにあらず、現今の科學主義は此關係を顛倒し居るものにあらずやと罵倒し、「科學の歸する所又人生を指導し得る所以の原動力はフアラデーの所謂インヴァイシブルである」と論結せり。然らばフアラデーの所謂インヴァイシブルとは何ぞや、曰く、姉崎氏の所謂神祕即ち是れなり。而して氏は此の科學の歸趨にして又人生を指導する所以の原動力たる神祕に体達する方法を示して曰く、「吾等は藝術に依て無朕無象の觀念界を具象的に体得し、これに依りて永遠の憧憬を満足せしむるのが人生を豊富にして不動の満足を興ふる最簡便なる又恐らくは唯一の捷徑である」と。然らば此藝術に依りて神祕界を体得したる時の状態は如何、氏曰く、「美の享樂は愛である、肉欲的の愛でなしにプラトニ的の愛である、信仰や敬虔と殆んど相近い愛である、是れに依て吾等は肉體時處に束縛せられながら其時處形式の中に永遠不變の實在を直觀して直接に精神的交通をなし遂げ得る愛である」と。然して如斯吾人が藝術に依りて神祕の中に精神を遊ばしめ一切の世間的利害得失思慮活動を越えて時處因果の外に優遊することを得る所以の者は、實に吾人精神が自他の差別を超越して相互に交感響應し得る神祕性あるに基ける者となし、「精神交通に依つて現實を理想化するのが即美に撞る、我等の天性である人間精神の神祕である」と云へり。然

り、實に氏が謂へるが如く現實の自我を没して自己の中に他を感じ他の中に自を感じる自他融通の神祕の上に美は成立す、美感の中に在りて我等は世間的利害得失を脱却して縹渺たる妙樂を感じるは事實なり、然れども人にして果して人たる以上は永らく如斯境界に止まることを得るや否。飄揚として自在の翅を翳り美妙の世界に優遊す、甚だ可ならざるにあらずと雖、人は自ら食はざるべからず衣はざるべからず、親に事へ妻を保ち子を育て國に盡し、人に交り、醜態と戦ひ憂鬱に堪へざるべからず、俗情は身に絡纏して一日たりとも氏が謂ふが如き享樂を恣にする閑を興へざるを如何せん。少くとも身味境遇の上は何等の憂なき天の寵見か若しくは一切の俗累を断ちて塵外に放浪せる四行芭蕉の徒にあらずんば能はざる所なりとす。若し之れをしも能ふべき事なりとするも睡生夢死の徒と歎よみ乞食のみの集合なる何等の波瀾も變化もなき世界は餘り過ぎしものにあらずるべきにあらずや。

次に氏は氏が所謂神祕に基ける道徳を示して曰く、「神祕の中に優遊する精神に取つては一切の事物皆我ならざるはない、これを稱して無我といふも若しくは大我と云ふも少しも差違はない、利己だの利他だのいふ紛々たる差別見解は此無我即大我の愛の中には消滅して了ふ」と。而して此無我即大我の愛は小なる我執愛憎に對する時は、同時に大なる憎となりて發表することを脱き、此愛の中には春風秋霜兼備はる攝折の二面の活動の兼れ具はれることを明にして、斯の如き愛に基かざる世間の所謂道徳を以て御都合道徳なり奴隸的道徳なりとして排斥し去れり。氏が自他融合の愛と無我即大我の自覺とに基かざる利他や服従を以て御都合道徳なり奴隸的道徳なりとせるは、實に通俗道徳若しくは科學主義の道徳の急所を衝き得て、頗る痛快なる者ありといへども、氏が所謂善惡邪正を超越せりとなす愛即憎の内容に到りては、又甚慷慨たる能はざる者あり、氏が所謂無我即大我の愛といふも畢竟無朕象の觀念界を觀照する美的優遊の別名に過ぎず、氏は果して個々別々の特色を有せる人格の樹立を以て無意識の事となすか、苦痛に堪へ醜態を忍び運命にさへも大逆行して致て屈すること

欲せざる生命の奮闘を以て無價値の事となすか、是等は總て我執煩惱より結果し來れる虚妄の事にして氏が所謂美的優遊の一事のみが眞實有意義有價値の者なりとなすか、然れども如斯美的優遊とは氏が謂ひし如く一切の世間的利害得失思慮活動を絶せる觀念界を觀照するの謂ひにして畢竟内容なき空なる生活即無生活にあらざるか、あはれ空々寂々を以て極致となせる道徳よ、汝は人に死を強ゆるものにあらずして何ぞや、御都合道徳は死ふべし、奴隸的道徳は尙ほ死ふべし、然れども死の道徳の忌むべきには勝らすや。

氏が所謂宗教の如きも亦斯の如き寂滅界に没入する手段たるに過ぎず、氏が所謂信とは人にして能くかゝる寂滅界を体得せる者即神人に對する信頼にして、望とはかゝる信頼に依りて寂滅界を自身にも亦体得することを得べしとの確なる希望にあらずや、嗚呼寂滅の愛、寂滅の信、寂滅の望、是れ即氏が所謂三一の體にあらずや、宗教が與ふる唯一無二の體は果して如斯ものなるべきか、若し然りとせば吾人の安立は死に依りてのみ初めて可能ならざるべからず、氏が所謂宗教とは實に絶望の宗教にあらずして何ぞや。

氏が所謂神祕の斯く全く内容なき空々寂々の者となりたりたるは、是れ平等を過重して差別を輕視したる結果にして、又其論の出發點たる藝術に於ける極端なる表象主義を取りしに基く。吾人の觀る所に依れば、藝術は神祕の表象にあらずして直に神祕其者なり、又吾人が差別的生存は單に依りて以て永遠の平等界に到達する階臺にあらずして直に平等を帯して現はれたる差別なり、然れども吾人は次第に於て致て吾人が信する宗教道徳藝術即絶望にあらずして希望の宗教、死にあらずして活動の道徳、優遊にあらずして創作の藝術に就て論じ大方の是正を煩はさんと欲するを以て、爰にはそが詳説を要す。

要するに氏が「復活の曙光」は現今の思潮に瀕れる科學主義實利主義の駁撃として見る時は頗る興味ありと雖一個の主觀の主張として見る時は掩ふべからざる缺陷の存するあり、又氏が所謂神祕の如きも一時人心を無何有の境に誘ひ去りて幽妙なる安愉を供すと雖、未だ不動の安心立命上に生活を建設せしむるが如き積極的力

用を缺如せることは余の信じて疑はざる所とす。

(流南生)

(著者附記)の批評も亦、著者の「神祕」の内容を表明する事を要求せらるる者であるが、内容とは抑も何者であるか。この評者がキリストの云つた「心の貧しき者は幸なり、そは天國を見る事を得べければなり」との一言を玩味せられる事を希望する、又維摩は何故に最後に黙したかを考へて戴きたい。但、評者が本書の序論的性質を看破して、尙その奥を要求せらるる事は、著者も自覚しておる處で、全力を注いで、早くこの曙光をして中天の燦日たらしめん事を希ふのである。

その四、精神界四卷二號批評

『復活の曙光』は姉崎正治君の著に候。「學術的轉機は固より期する所でない、只一片の赤心黙し難く抑へ難き者ある事に至つては天下一人なりとも之を認めて、僕と同じ胸を打つ人があれば願足れりである」とは著者の自序に記す所、記者は確に君と同じ胸を打つ人と信じ候。著者の願ひ是れりや否や。本書は人生と科學、科學と藝術、藝術と神祕、神祕と道徳、道徳と宗教、宗教と人生の六章より成り、平易なる文を以て、靈的曙光を記載せられたる愉快なる書に候。「一年有半」の讀者が、「天人論」の讀者と成るのは、「一進歩に候。天人論」の讀者が本書に來る亦一進歩に候。本書の讀者がキリストに類き、或は南無阿彌陀佛と稱せらるに至るは次に來るべき一進歩と存候。著者が對て記者に贈りし書簡の中に「學術に迷はされ、知識に渴したる身も今は世の方向知識も靈の光に照らされずしては何の功もなきを思ふ事切也。僕は未だ信を得たりと云ひ得ず、只信の力たるを感得し、此力を得んとして努力するに至りしを以て無上の喜びとなす」と記せしは、全く本書の大精神と存候。「人即神」の福音が明に一人の人間の生命に顯はれて、吾等に神を父として此に合一することの出來る保證を與へた。「人の子」は天國を吾等の間に持ち來し、「如來」は寂光の土を此世に現はした。吾等人間を罪人とし

て叱責したキリストが「天國は汝等の間にあり」と教へ、此土は穢土である、吾等は凡夫である事を痛嘆し

た佛陀が其如實の正覺身を現はして常に吾等の心に住すと云ふ事、是れ皆矛盾の如く見ゆる神祕である。此の如き矛盾を人々に知らしむるばかりでなく、人々の生命に映得せしむるのか宗教の天職である。此矛盾か自己人格の中に矛盾もなく、此神祕か其人の生命となつた人か即ち宗教の人である。

肥者は姉崎君が宗教的遺贈を疑ふ能はず候。自己を罪人と信じつゝ、如來攝取の光明の内に、自己を全宇宙と観するは我等の信念に候。我等は『復活の曙光』を讀みつゝ、我等の胸に宿れる如來のまゝやきを姉崎君の靈氣ある冒語の上に聽くの念に打たれ候。道友諸君の一讀を勧め申候。併せて我等は姉崎君が所謂神祕を我等と共に如來と呼ぶに至られんことを南無阿彌陀佛の内に念じ申候。

(著者附記。如來といひ、靈といふ、何れにてもよろし、佛の言に曰く、正信於如來、決定不傾動。於佛心清淨、成就於正見、當知非貧者、不空而自活。)

その五、白百合四號批評

『復活の曙光』は、姉崎嘲風氏の著なり。二篇に分る。本篇は科學、藝術、神祕、道徳、宗教、並に人生に就て、一貫したる論評を試みたるもの。外篇は文學、宗教等に關する、長短二十餘篇の論文集なり。外篇に集めたるは、一たび雜誌に於て世に公にせしものなれば、新に之を紹介せざるべし。そのうち、『悲曲サツボー』論、『詩眼に映せる救世の使命』等は、帝國文學に出て、讀者の注意を引きしこと少からざりき。今、本篇の内容に就て少しく云ふところありしめよ。科學は單に人間の思想生活の發表なれば、人生の根本的要求の爲めに存在し、人間の目的たる精神の満足に役せらるべき者なり。吾人の經驗や理想を説明し探求する義務ありと雖ども、之を建設する権利あるなし、著者はこの理由を以て、科學萬能主義を喝破し我邦の國家論者が一方に於て科學主義、現實主義を標榜しながら、他方に祖先崇拜の宗教を以てその落實たる人生觀を潤飾せんとするを笑へり。而して、豫言者なく救世主存せざる今日に於ては、宇宙の深處に達し、人生の安立を得る所以

の易行道は、即ち藝術にありとし、之に對する二大誤解を辯ぜり。美術は娛樂の具にあらず、その目的は人間共通の性能を通じて、時空を超越したる實在界と交はるにあり。従つて、その表象を必要とせざるべからず。之を否認する感覺主義、物質主義の美學者は、美術その物の存在を否認するに等し。吾人は美術の表象を経て宇宙の大精神と相應す。これ、神祕なり。只現象界のみを見て、それが基づく實在を求むることなき人には、迷信の如く見ゆべけれど、神祕の極に達すれば、一切不思議の中に常住の實態を現じ、恰も萬物が或は骨、或は赤おのの其色に従つて、一つの太陽の光をあらはす如くなるべし。美の享樂とは、かゝる間に優遊するを云ふ。而して一切の事物皆我ならざるなきなり。是に至つて、自他の區別なく、また善惡の判斷なし。かの個人主義にせよ、社會主義にせよ、自他の利益と都合とを目的とする、現代の倫理思想は、全くその根據を失はん、之を無我又は大我と合一したる神祕的精神の立脚地と爲す。かゝる人の體する道徳は、愛の道徳なり。而して之を吾人に體得發表せしむるは宗教の天職なり。釋迦にせよ、基督にせよ、その説きし教理に相異なれるところばあれ、人間の心情を極めて、大我即ち神に合一したる人格は、即ち神祕的なり之に踏敬するは、信なり。人は宗教の信なくして生活し得れど、信なければ大なる望もなく、大なる愛もあることなし。即ち、信望愛三一の徳に依つてはじめて矛盾多き人生をして神祕の光に融和せしめ得るなり。以上は本篇の要旨なるべく、『歸する所は、吾等は自ら吾等精神の神祕を洞觀して、其に依つて、大なる精神(神)の根底に入るにある』といふにあり。聽く著者は神祕主義を標榜して、我思想界に一旗幟を擧げんとすと。エマーソンはスピテンボルグを以て神祕論者の殿と爲せしが、著者は之を科學隆盛の現代に復活せしめんとするもの、如し。必らずしもスピテンボルグの如く極端なる主義を提出する勇氣ありと云はずと雖ども基督教徒にあらずして、而も忌憚なく『萬邦の上に立てる、國家民族を超えたる教會』を脱き、『神を眞の父とし其父の下に兄弟の愛を實行するものは淨世の假りの父、假りの兄弟に背かざるを得ない』と斷言し得たるは、かの福音書的主人公が『平和を齎せん

爲めに吾れ來れるにあらざらん』云々の意氣込を解し得たりといふべし。また、『近世に宗教と教育との衝突、或は宗教と科學との競争と云はるゝ現象は、人間の根本的宗教心と——相容れない爲めに生じたのでない。教會は古の科學に依つて定めた世界觀が——今日の科學的教育と衝突したのである』と云ひ、『已れの心の内の大なる愛を幾分ても感得し得たれば、其の愛に抵抗する或者が己の内に發動するからして、吾等はそれと戦はなければならぬ。之に對して愛の憎を發表せざるを得ない。此の憎こそ即ち眞の道徳的練習である』と云ふが如き、世人の味ふべき言なりとす。然りと雖ども『ヤソに現はれたる基督が神であるとかないとかいふ議論によつて、基督教の内に異論を生ずるのは、殆ど無意義の論争である』と云へるは、著者が佛教と基督教を同一視する論點より來ればこそ。若し反對の論者より見れば、尙深き意義の存するなからんや。著者が基督兩教に對する態度は、恰もかのスピノザが、下宿屋の老婦の問に答へたる時の如く、『いつれにても、心に良しと思ふものを信ぜよ』と云ふに過ぎざる傾向あり。これ著者が文意の越せざる爲めか、或は著者が單に宗教論者たるが爲めなるか。また『倫理的宗教を以て唯一眞正の宗教であると主張する人々は、多くは現世的道徳を以て道徳の至極と考ふ』と貶する論者が、先に倫理的宗教に脱化せし横井時雄氏と協同して、『この度雑誌『時代思潮』を發刊せんとす、この兩者が如何なる程度まで一致の運動を爲すか、吾人は豫め之を知らんと欲すると切なり。最後に尙一言を添へしめよ。神祕主義は表象主義なり。表象主義は藝術を以て或者の奴隸と見爲し易きなり。著者が極端なる寫實主義を排斥するは吾人の意を得たるころなれど、表象主義の爲めに、却て藝術の獨立を危うする恐れなきや、スピテンキルグの如く、この世の馬は肉の情性を表し、木は知覺を現はし、月は信仰の影なり、など主張するまでには至らぬまでも、『教會の助けを爲して、人生に神祕の甘露を雨らすべき者は藝術である』といふが如き、専ら藝術に従事するものをして、聖かこの懸念を抱かしむるものなきはあらず。妄言多罪。(落々)

(著者附記。この評論での「神祕主義標榜」「表象主義」等の雜問に對しては、この附録の始めて辨明して

おいた通りである。専ら藝術に従事云々の事は、その従事が人生の爲めであるか、將た又職業の爲めであるかと反問するに止めて置かう。)

その六、新人五卷三號海老名正氏

近世の著書中日本人の著述としては、姉崎正治氏の復活の曙光ほど予の興味を喚起したるものはあらず。此書は予が言はんと欲して言ふこと能はざる所を、全く異なりたる方面より表白したるものにて、予は滿腔の同情と尊敬とを以て之を歡迎したるなり。若し夫れ幸にして我が人格の外に尙一個の人格を合せ加ふことを得ば、其人格は復活の曙光の著者其人のそれならんことを望む。姉崎氏は科學的教育の寵兒なり、科學萬能主義の時代に生れ、完全なる科學的教育を付け、高山樗牛の如き英才と共に、十二分に科學的思想を喚發するの便宜を得たる人なり。而うして今や彼は科學萬能主義の非を看破して、別に神祕の新天地を開拓し、不可思議の境涯に無限の妙樂を求めんとす。予は科學的普通教育の初歩を經過したるばかりにて、直に宗教の生活に入り、神祕の靈能を自得すると同時に、教理や儀式の餘りに科學的なるに驚き、彼の聖書萬能主義の非宗教的なるを看破し、此見解を打破し去るにあらざれば、到底宗教の妙境に入るべからざるを絶叫しつゝあるなり。予は彼の傳説や奇跡談を以て神祕其ものと混同し、又は教理や信條を以て宗教其ものと混同するものが宗教の生命を害ふは科學萬能主義と徑庭なきと見たり。偶宗教の妙味を味はんと欲して、其門扉を叩き來るものあれども、苟も科學思想の幾分かを有するものは、彼の不合理なる、否寧ろ非神祕的なる非宗教的なる教理信條に照きて、宗教其もの、妙處を看取すること能はざるは、予の浩歎する所なり。彼の煩瑣神學なるものは一種の科學なり。基督の時代に於ては學者とパリサイの人之を代表し、人々をして靈能よりも口碑、註釋、教義を重んぜしめたるなり。

之に反してエシニ一派は冥想に耽りて其處に神祕の天地を開かんと欲したりしが、マフテスマのヨムネ及基督

の徒は、此神祕派と深き關係ありしが如く思はる。中古の學者が宗教を専ら理會力に求め、アリストテレスを以て聖人視する迄に至りたるに反して、宗教の妙處を各自の胸底に發見したるは、即ちエクハート、タワレル等の輩なり。ルーテルは此の大なる感化を受けて起つたれども、其徒弟が宗教を聖書萬能主義に求め、又た古人の傳説教論に尋ね、自ら之を意識するにあらず、感發するにあらず、冥想するにあらずして、たゞ古人の意識感發取想したる結果を理解せんとのみ務むるに當て、ライゲル、シエンクフェルドの輩や、スパーネルの如き敬虔家は宗教の妙處を各自の神聖なる心裡に見出すことを得たるなり。近世の宗教家はまづ科學の襲撃を恐れ、獨りに神祕の靈霧を起し、只此靈深く霧滅なる所に其安全の居住を占めんとす。古の神祕家は傳記や教理を輕視し、否認る之を記號として自家の心裡に神子の誕生や生長や、苦痛や十字架や、復活や昇天を實驗したりしが、今の神祕を言ふ人々は客觀的に傳記や教理等を不可思議として遊弄することを神祕と心得、深く己が心裡に思を潜めて直接に神の聲に傾聴することを知らざるは、今所謂科學者が物質と理法とのみに執着して、之を研究する人の精神と天地萬有の精神とに思ひ當らざると其誤を一にするものあり。かくの如き神祕の靈霧は科學の太陽に照されて忽ち消滅するものにして眞の神祕にはあらずるなり。吾人は之を迷信といふ。予は姉崎氏の神祕を歡迎すると同時に此の似て非なる神祕を排斥せんと欲す。姉崎氏は科學萬能主義を排斥すると同時に、科學の眞確を明にし、人をして科學の由來する靈能其ものに活眼を開かしめんと欲す。予嘗て解剖室に入り、人體の解剖を目撃して、其組織に驚愕したり、されど之を解剖する所の人心の更に靈妙なるには復一入深く驚かざるを得ざりき。教理や信條の如きも各自の宗教的實驗の表象として之を觀れば、固より價値ありと雖も、只之を遊弄することが宗教其ものやうに心得るは、全く主客を轉倒したるものと謂ふべし。科學者の精神と萬有界の理法とを結び付くる大精神を發揮するは姉崎氏の主張にして、吾人が早くより之を主張したる所なれども、今や帝國科學的教育の寵兒より之を聞くことを得るは、吾人の最も歡迎する所なり。

彼の聖書萬能主義が神與を天啓をも過去の事として之を聖書中に葬り、又彼の三位一體論者が神位をナザレの耶穌一個人のみに奉獻して、ヒュルマニチー全體を輕視するが如きは、即ち神靈を過去に葬り、又は天外に敬し遠くするものにて、反て神人を離間するものなり。予が宗教的實驗は全く此主義に反し、予は自から心の内に神子の誕生を視し、神が之を悅樂し給ふ聲を聞き、又此神子がゲッセマニの苦悶奮闘をなしたる後其肉情を十字架に磔殺して、勇ましく光明界に復活し給ひたるを目撃したるが故に、神のロイスは獨り過去一千九百年の古、ナザレの耶穌に化身したるのみならず、爾後今日に至るまで、吾人類社會が天國となるまで、數多の善男善女に化身しつゝあるを認識せざるを得ざるなり。さればこそ一千九百年の古、遠き異郷にかゝれたる聖書が最もよく我宗教道徳の情感を言ひあらはし、彼我肝膽相照らして殆んど其二つなるを忘るゝに至るを覺ゆるなれ。二千五百年前の異郷の豫言者も我を去ること遠からず、實に時間と空間とを超越して、我が友となり、我が兄弟となり、我姉妹となり得るは、畢竟するに東西古今に遍在するロイスが、其媒介となるが故ならずんばあるべからず。姉崎氏の引照したるクプラーの言は最も能く予の祈願を表白したるものなり、曰く「余の願ふ所は神を知覺することなり、予は神を外界至る所に發見し得れども、其れと同じく自己が内界にも同じ神を見んと欲す」と、予は神與と天啓との眞實を疑はざる丈其れ丈、聖書の神與と天啓とを疑はざるなり。又予は自家内心内に神子の實在を確信する丈其れ丈、耶穌の神子たるを確信するなり。彼れと我れとは時を去ること二千年、地を離るゝこと數千里、風俗を異にし、言語を異にし、人種を異にし、國籍を異にし、生活を異にすれども、其近接すること父子よりも兄弟よりも夫婦よりも親密にして、彼れ我に居り、我れ彼に居り、彼我一體の意識に入るを得るは、同じ神子の靈を有するが故ならずんばならず。斯る宗教的神祕を科學の方面より發揮したる姉崎氏には、獨り予が滿腔の至誠と同情とを以て謝するのみならず、亦多くのクリスチャンが謝すべき所ならずんばならず。予は藝術の上に付ては言ふべき權利なし、豈し未だ藝術の何たるを學ばざればなり。然

り、雖も神祕を表象する藝術に至りては予亦一盲なきこと能はず。予は近世の日本畫を見て殆んど神祕の妙境に入るに能はざるなり。彼の人物畫の如き、我れ其手足あるを知て、其心腸あるを見るに能はず、我れ其耳目鼻口あるを見て、其無限の靈魂あるを知るに能はず。姉崎氏の紹介したるマダム、ジョーンスの畫の如きは予之を見るに能はざるを遺憾とす。予は分けて彼の寫實主義者が僅に淺薄なる皮相のみを寫し取りて、神靈其ものを寫し出すに能はざるを遺憾とす。今の畫工は筆と色彩の末に馳せて之を運用する神靈其ものを忘れたるが如し。彼の淺薄なる科學者が物質と形状と理法とのみを知りて宇宙精神に心付がざると一般なり。分けても寫實家が、最も下等なる、精神乏しき人物を模寫するに至りては、果して美の何たるを知れりやを顧はずんばならず。予は獨り畫につきてのみ之を言ふにあらず、彫刻につきても文章につきても同一の遺憾を懐かざるを得ざるなり。文章の如きも辭句の美なるは我れ之を見る、言題しの巧なるは我れ之を感ず、しかも予をして神興の妙處に至らしむるものは殆んど稀なり。彼の多くの小説家が最も下劣なる質物を掲げ來りて、巧に之を寫實し、人々をして臭氣鼻を被ふ死骸の累々たる中を往來せしむるが如きは、無限の理想界に遺棄する君子の最も厭ふ所なり。斯の如きは竟學するに藝術家が形而下の事物に耽はれて専ら其技術を筆硯刀鋸の上に研磨すると同時に、之れを以て利用厚生之用具と思惟するが致す所なるべし。

然るに姉崎氏は耶穌も釋迦もナポレオンも宇宙精神の表象にして、吾人の目前に顯現したる最高の美術といへり。予はこゝに至りて始めて言はんと欲して言ふこと能はざるもの言ひ願はされたるを謝せずんばならず。四福音書の文章は言句必ずしも秀逸なるにあらず、言題し必ずしも巧妙なるにあらず、然かもその大文章として古今にもてはやさるゝは何ぞや、古今に卓絶する理想の人格を捕捉して之を寫し出したるが爲に外ならざるべし。彼の木や石が活ける人體に比すべき價值なきが如く、著者の文章は耶穌の人格に比しては殆んど一毛の價值を有せざるなり。しかれども其題目の偉大なるが爲に讀者をして言辭を超絶する人格に接觸せしめ、

言々句々千金の價值あるを感得せしむるは、硝水石が大人格の表象となり得て、千金の價值を生ずるが如し。畫工も畫工以上の人格となり、彫刻家も彫刻家以上の人格となり、文章者も文學者以上の人格となるにあらずれば、到底藝術の妙處に達すること能はざるべし。然かして其妙處といふは凡百の技藝の一致する所にして、乃ち神祕の境涯に外ならず。姉崎氏は音樂の妙處をも紹介し來れるが、之に對する予の感想も亦同一なり。今の音樂者は専ら聲を練り手指を鍛ひて、其技術の妙處に迷せんと欲すれども、吾人は其が響音器の最も巧妙なるものに外ならざらんことを恐る。音樂は響の最も深微なる作用を發表するものにて、同情の人々をして恍惚として神靈の妙境に到らしむる能あり。古人が神明を感動せしめんと欲して至誠を音樂に注ぎ出したるといふは、則ち俗人其もの、靈と宇宙の神靈と感應するものにて、若し夫れ同情の靈氣を發揮して之を開くあらば、之も亦俗人と偕に無窮の靈に融合するを得ん。是も予が聞んと欲して容易に聞くこと能はざるもの、此神祕の妙處に思を潜めずして、徒らに藝術を研くは予の斷じて取らざる所なり。予は曾て凡百の藝術を輕視し覺視して短刀直入靈界に入るを務めたるものなり。今聊靈界の妙處に遊び來て藝術界を觀し始めたるに、不思議に我れ自から藝術の何たるかを識別する美惑の我が内心に存するを自覺す。是れは藝術より學びたるにあらずして、全く神祕の妙處に入りて聊自得したるものに外ならず。姉崎氏の藝術と神祕の章を讀んで、覺えず同情の念禁すること能はざるものありしは是れが爲なり。

著者は愈説き進んで、神祕と道德とを論じたるが、予と同主張を發表するに當て、予と全く方面を異にする所反て、亦甚だ少からざる興味あり。予は基督教を信するときに、淺薄なる儒教道德や封建時代の格式道德を打破し去つて、神と實際し始めたるなり。予は遺傳の性質全く一變して更生するにあらずれば、眞の善人となる能はずと自覺したり。神人の最も不思議なる類の實際は道德の源泉にして、道德は枝葉の如く宗教は根幹の如くなれば、専ら心を此妙處に潜め、神の民より一轉して神の僕となり、神の僕より一進して神の小兒となり、

更に一轉一進して神の子の妙境を悦樂し、今や全く轉環して専ら道徳界を清淨にせんと欲す。姉崎氏は今の所謂都合道徳、習慣道徳、はた儒教及教育界の淺薄なる忠孝主義の淺薄を看破して、人々をして普遍的神祕の妙境に到らしめ、道徳の根底を各自々律的意志の交際に据へしめんとす。此の如くして彼は小道徳より一轉して大道徳に進み、小我の區々たる道徳に安んぜずして、大我の平等主義道徳を發揮す。キリスト教の長く邪教として排斥せられたる大道徳が神祕家の見地より義とせられ、遠く儒教道徳を卓絶するものとせられたるは、島國根性一變して大國民たらんとする我日本民族の爲に祝すべきことなり。斯る大道徳が帝國教育の寵兒によりて主張せらるゝに至りたるは、則ち日本民族の根底に偉大なる靈能の實在して、之を指導しつゝあるを證明するものなれば、吾人は我が海戰の勝利を歡喜するに劣らざる歡喜を以て之を歡喜せざるを得ざるなり。

著者は既に道徳の根底が深く神祕の中に根ざすことを觀たるが故に、宗教を以て道徳の方便とするが如き愚論を擧げざるや言を待たざるなり。彼は曰く小我が已れを大我の内に没して精神の同情交通に依て、他の精神と併に大我の内に優遊することができざるやうにするのが、即ち宗教である、又曰く宗教の心髓は、一言にして盡くせば、大我即ち一切精神の根底を吾等の精神に體得することである。宗教は道徳の分野以外に光明なる別天地を有す、蓋し宗教は小我と小我との關係にあらずして、小我が大我を體得することなればなり。著者は大我を體得する道一にして足らざることを明にしたれども、小我が自からの中は大我を體得する素質あるを斷言す。或は無常相を打破して、淨光眞如の境に入るあり、或は罪惡を斷滅し去つて光明活動の域に進む、或は智の方面より開悟し、或は意志の方面より解脱し、肉より靈に入り迷より覺に移るなど、之を換骨すれば大別して佛耶の二方面あるを評論せり。而かして彼は基督と釋迦との二人格を擧げて之を完全なる模範といへり。彼れが釋迦を以て凡夫以外のものとして之を遠け去らざるが如く、亦基督を以て人の子即ち人の模範となし、人々をして彼れの意識に入らしむるの可能なるを論斷したるは、最も予の宗教的意識を満足せしめたるものなり。

り。基督は道徳の方面より仰ぎ見ても、宗教の見地より窺ひ見ても、人間最高の宗余なる人格なり。宗教と道徳とは基督の人格に於て一教合體す。宗教の根底より發せざる道徳は區々たる小我のそれにして、決して大我のそれにあらずるなり、道徳の實踐に實現し來らざる宗教は活動的大我のそれにあらずるなり。著者は専ら前者を論じて後者を論ぜざるなり。是れ決して後者を看過したるにあらずして、世の區々たる道徳論の謬見を打破するに忙はしかりしが爲なるや予は毫も疑はざるなり、蓋し彼は基督教と人生の結論に於て左の如く斷言したればなり、曰く「根本にして確立したならば、根底の活動機關を作り得たならば、餘事は破竹の勢である。慈善事業とか、宗教と教育との關係とか、教會と國家との關係とか、問題も困難も自らにして解決する。隨する所は吾等は自ら吾等精神の神祕を洞觀して、其に依て大なる精神の根底に入るにある。」此の如き主張が我大學教育の寵兒よりかく速に提出せられんとは予が期する所にてあざりき。しかも既に聲言せられたり。高山樗牛が悲慘の聲を放ちしは果して野の聲なりしか。其同級の學友より吾人は彼れが叫び求めしもの、實在を聞くを得たり。予は嘗ていへりき、樗牛の聲は樗牛一人の聲にあらず、彼は多くの青年學生を代表して叫ぶものなりと。復活の曙光豈に寂寞たる一個の明星ならんや。

(著者附記)海老名師は基督教界で最も異彩を放ち、幾多の人心に力を興へつつある人で、著者の最も畏服しておる當世の人物である。その人からこの小著に對して滿腔の同情を寄せられ、且つその所説が實によく著者の胸中を透見せられた事は、著者にとつて一生の慶喜である。基督教の方には此の如き反響を得たが、佛教の側からの評論に乏しいのは著者の遺憾とする所である。

この外幾多の批評に對しては、一々答辨をなさず、缺禮の罪を謝しなければならぬ。特に守本文靜師は本書の各頁に朱書で細評を施し著者に送られたが、この細評

を一々こゝに出だす事の出来ない事を憾とする。

(尚一言田中南市君の問に答へて、併せて他の同様の疑ひの人に告げたい。著者自身は固より完全に神の愛を
體現し得たと稱するのではない。然し、神人の人格を敬仰し、天然の美、藝術の美を味ひ、且つは人知の宏大なる
事、鳥は空に飛び、魚は淵に躍る、天然や人生の燦爛たる光輝活動を觀れば、假令人生には罪惡があり、天然
には災害があるにしても、その根底には何か偉大なる靈力の存して、その靈は石を地に落とし、花を咲かし、
人と人と精神相照らしめ、人と自然と呼吸相通せしむるのみならず、又吾等の喜悲に對して一々同感をしてお
る大神神、大恩父である事を信ぜざるを得ないのである。此を迷ひといふ人があるならば、その人は石の落ち
るのも偶然、親子相愛するののも偶りとしてその日の利益快樂を追ふて生活する外なからう。苟も去年咲
いた花に實つた種子が、今年蒔けば芽を出す事が偶然でなく、親子相愛し朋友相信する至情には偶りならぬ、
或る者があるとすれば、その永遠の原動力を何と名くべきであるか。又星と星と相引き、葉は空氣を吸ひ、根
は水を掛け、千億里の彼方の星の閃光が地上の花弁の色彩に影響を興へ、人と人と相和して茲に社會が出来
るとすれば、それ等一切の活動の源泉は、又統一あり聯絡あつて、決して混沌靈爾の力であり得ない。之を神
とし、之を父として愛するのは人生の必然の根底ではあるまいか。キリストが「日用の糧を今日も與へ賜へ」と
いつた祈りは「與へくれるかどうか分らぬが、一つ祈つて見やう」といふ祈りてなく、神は必ず與へてく
れる、永遠の昔から、永劫の未來までも與へてくれるといふ確信至愛の發表である。神を父として愛する事が
即ち神を知る事、神を知る事は即ち神意を體得し實現する事である。空氣の中にも、日月の光りにも、人心
の機微にも、この神を發見し得る人心の性質は即ち著者の所謂の神祕である。それ故にこの神祕の信が萬事の源
で、活動も、向上も、理性も、生命もこの源泉を汲むだ力から出なければ無益であると主張するのである。こ
の源泉に入れば、死といふも畢竟永遠の一波瀾に過ぎない。神は何である、その力はどこにある、罪惡は向上
の防壁であるか、善根は成佛の因となるか、此等の問題はこの光明の中に没し去るのである。此が即ち佛敎の
悟道、陽明の工夫、基督教の愛の必要なる所以である。)

明治三十七年十二月廿九日發行
明治三十七年十一月廿七日再發行
明治三十七年十月十五日增補五版發行
明治三十七年十月八日發行

復活の曙光

定價金七拾五錢

(不許複製)

章者行發	章者作著

著者 姊崎正治 東京市小石川區指ヶ谷町七十八番地
發行者 太田資順 東京市麹町區富士見町貳丁目三番地
發行所 有朋館 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者 青木弘 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舎第一工場

發賣元 大賣捌所

東京市本郷區本郷四丁目八番地 (電話下谷八二六電報略號エホ)
東京市本郷區上田屋 ●東海堂 ●林平 ●大阪吉岡 ●柳原 ●名古屋 ●川瀬 ●久留米 ●菊竹 ●長野西澤 ●新潟萬松堂 ●北光社 ●仙臺弘道 ●金澤宇都宮

By Albert J. Edmunds,

Honorary Member and American Representative of the International Buddhist Society of Rangoon,
Member of the Oriental Society of Philadelphia.

With Notes and Supplements from the Chinese Buddhist Tripitaka.

By Anesaki Masaharu.

Professor of the Science of Religion at the Imperial University of Tokyo,
Associate of the Society for Psychological Research.

佛教と基督教との比照、そのみにても學術界、宗教界の難事業なり。本書はこの事業を一々二者聖典の原語より翻譯して、忠實に二教主の福音を對照す。單に學術上未曾有の新著たるのみならず、又信仰界の珍寶たり。加ふるに日支佛徒の爲にその聖典の出處と本文とを明かにし、新約聖書本文の所在を日本文にて示せり。是れこの二大宗教が接觸して以來最初の完全なる對照なり。日月の并び懸るが如く帝網の相反映するに似たり。

(注意) 右二者を并せて購讀せらるゝ諸君は豫約購買者として割引をなし、最初に「現身佛と法身佛」御求の時、(發行元に限る)その定價を拂ひ込まれるれば、來年三月(前後に一二ヶ月の遲速なきを保せず)「佛教と基督教との福音」發行の節、その定價の貳割を減じて貴需に應ずべし。

文學博士 姉崎正治著

增補 五版 復活の曙光

●製本優美高尚總クロース金文字入
●四六判四百八十餘頁
●コロタイプ版名畫貳葉挿入
●定價金七拾五錢 郵税八錢

●物質文明、形式教育の爲め殺されたる靈は、何れの時如何にして復活すべきか。「復活の曙光」は現はれたり。光を望む人は請ふ凝視せよ。この聲に應じて世間は如何に反響したるか、その光りは如何に世の暗を破りたるか。五版發行に及びて、著者の補説と批評に對する答辯とを増補す。干戈の黒雲にも蔽はれざりし、曙光が一段の光彩を添へたるを見られよ。

文學博士井上哲次郎序
女子高等師範學校教授
兼東京高等師範學校教授 文學士吉田熊次著

社會的倫理學

菊 版 洋 裝
クロー ス 金 文 字 入
定價 金 八 拾 五 錢
郵 稅 金 八 錢

●道德の論愈盛にして世人の疑惑益深し。是れ研究法其宜を得ざるに依る。吉田先生多年の研鑽を積み此書を公にす。斬新なる見地、至公至平の發案。眞に倫理學界の光明。

文學士 加藤 玄 智著

通東西比較宗教史

菊版 定價洋 郵税金七拾五錢本

●宗教は千古の秘密、人生の一大問題なり。其の發展激烈は決して偶然にあらず必ず一定系統の存するなかるべからず。本書筆を原始宗教に起し、佛耶兩大教はもとより、東西幾多の教旨、公平正確に比較研究し以て、修理明晰、筆端縱橫、眼光炬の如し。文體平易にして學生の良參考書たるは勿論苟も眼を人生の大問題に注ぐの士は座右必一本を備ふるなかるべからず。

獨國エルンスト、ヘッケル博士原著
日本文學博士男爵加藤弘之校閱并序 近
日本文學士岡上 梁合編 刻
日本文科大學研究囑託高橋正熊 刻

宇宙の謎

菊版 定價洋 郵税金五拾五錢本

●十九世紀の智識の總和は生物學なり、各學問の中心進化論なり、十九世紀に於ける進化論は十八世紀に於ける太陽中心説と同價値なり、而して當二十世紀の哲學は應に生物學的一元論なるべし、今、ヘッケル氏は生物學の泰斗にして進化論の領袖たり、ダイキン及びワグネルの敬する所、スベンサスの畏る所、眞に宇宙謎語を解くの任ある碩學なり、此書、職業的哲學者を罵倒し、宗教的迷信を掃討す、以て二十世紀文明の洗禮を授くるに足る。

東京高等師範學校教授文學士登張信一郎著

新教育 藝術篇

再版 菊版 定價金五拾錢 郵税金六錢

新教育 科學篇

近刻 菊版 定價金五拾錢 郵税金六錢

新教育 政治篇

近刻 菊版 定價金五拾錢 郵税金六錢

新教育 教育篇

近刻 菊版 定價金五拾錢 郵税金六錢

新教育 人類篇

近刻 菊版 定價金八拾錢 郵税金拾錢

●形式主義、模型主義、常識主義、科學主義は今の教育界の慘狀也識士出て賢士隠れ凡骨跳梁し天才恨死するは實に昨今吾教育界の陋態也竹風先生こゝに於て憤慨一番、椽大の筆を振つて、教育の新主義を鼓吹し、萬丈の光焰を吐くこと無慮一千有餘頁。深遠の學、雄健の文相待つて、あらゆる問題を解決する、眞に快刀亂麻を斷つの概あり。

教育者は勿論、詩人文學者等苟も思想問題に着眼せらるゝ諸君子は必ず精讀せられざるべからず。讀者諸君の便を謀りて全部五冊に分ちて之を刊行せしもの也。

女子高等師範學校教授文學士吉田熊次著

西洋倫理學史

近刻 菊版洋裝 郵税金 一ス金文字入

●希臘羅馬は思潮の泉源なり倫理學說パノラマ也吉田先生大學に在るの日より研究を始め茲に此者成る。眞に斯學研究の好資料附錄二箇二大哲人の倫理說批評。

東京帝國文學博士建部遜吾著

西遊漫筆

菊版洋裝美本 定價金八拾五錢 郵税金拾錢

●是れ水城先生の批評的西洋旅行記。周遊三年、遍歴二十餘國、社會政治宗教教育、燃犀の眼光、照し來て煙囪跳り、天女舞ふ。別に歐山の奇、米水の勝あり、點綴以て趣を成す眞に是れ燈下の好侶伴。

文學博士建部遜吾著

目下の 大問題 外政時言

菊版

定價金貳拾八錢 郵税金四錢

●これ政治家の議にあらず、これ學者の説にあらず、野人の聲なり、猷芹の微言なり。自序の記する所此の如し、以て本書の性質を知るに足るべし、君國に忠愛の士速に一讀せらるべし。

新歸朝者法學士原田豊次郎著

米國觀

附錄米國移民法原文並に譯文其他米國重要事項

菊版美本 定價金五拾錢 郵税金六錢

●著者久しく米國に遊び、頗る彼地の事情に通ず、歸來慘然筆を呵して一稿成る、此篇即ち之なり、奇警觀察、絢爛の彩筆、米國の面目露露として紙上に躍如たり、特に

米國外交策を論じ、米國商人を評し、東洋移民の前途を慨するの章に至りては、議論

縱横、叱咤風生、儒夫爲めに起つ、蓋近來の快著なり、渡米者は無論、學者、如生、實業家、苟も米國の真相を知らんと欲するものは必ず一讀せざるべからず。

東海散士柴四朗著 ●第三版 東亞地圖挿入

日露戰爭 羽川六郎

菊版四百餘頁 綴り美術的製本

定價金九拾五錢 郵税金八錢

日露の開戦は我神州未曾有の國難なり、唯其れ海戦は如何、陸戦は如何、露國及び列強の狀勢は如何、抑勝の決は果して如何、此書は小説にして小説にあらず、實傳にして實傳にあらず、東海散士が縱横なる文藻と確實なる事實に寓し平易に明暢に此問題を決して我國民諸君の一榮を博せんとするものなり。

英國評論主筆ズテッド著
法學博士 高田早苗序
法學士 五來素川関
黑澤和雄譯述

近世界人傑評論

肖像挿入 洋裝美本

定價三十三錢 郵税金六錢

本書は海軍英雄ネルソンを始め十九世紀の軍人。政治家。文學家。宗教家等百傑を評し且つ各史傳を附したるものなり。評論の劃切文章適勁味趣津々今や日露戦争は外交商業をして益繁激を極めしめんとす大國民たる者は世界豪傑の眞價を極めよ。

▲佐藤洽六著▼

俳界の奇書 俳諧 俳人の必携

紅綠子

洋裝美本

定價金卅五錢 郵税金四錢

本書は俳壇の重鎮佐藤紅綠子の白狀録なり著者が俳界に入りて以來の俳稿十六編二千

餘句を子規翁が一々叮嚀に添削批評を加へ且つ同門諸子の評點をも稿本のまゝ、些の修飾をも入れず版に付し添ゆるに子規翁終焉後記。子規子と芭蕉。俳句の色彩。紅綠漫筆等を以てす。正岡子規子の俳句作法。子規門の眞相を知らんには實に必讀の奇書なり。

▲太華先生校訂▼

川柳大全

全二冊 箱入美本

定價金四拾錢 郵税金四錢

●滑稽なること川柳の如きはなし、冷酷なること川柳の如きはなし、痛切なること川柳の如きはなし、ニク／＼しきラカしきオモシロき皆川柳の如きはなし、此書は川柳中の古秀句五千餘句を集む、新年の讀物として旅窓の讀物として汽車船中の讀物として御年玉とし贈物して此川柳大全の如く妙なるはなし。

▲文學博士上田萬年校訂▼

淨瑠璃なにはみやげ
文句評註

袖珍 定價廿五錢
美本 郵税四錢

▲文學博士上田萬年校訂▼

元錄 時代 輕口はなし

袖珍 定價廿二錢
美本 郵税四錢

- 目録
- 御所櫻堀川夜討
 - お初天神記
 - 安倍宗任松浦鑑
 - 北條時頼記並雪の段
 - 大内裏大友真鳥
 - 國性爺合戦
 - 刈萱桑門筑紫轢
 - 蘆岸道満大内鑑
 - 大塔宮囃鏡

- 目録
- 醒醉笑
 - 昨日は今日の物語
 - 鹿の巻箒
 - 露がはなし
 - 輕口あられ酒
 - 福録壽
 - 輕口福とくり

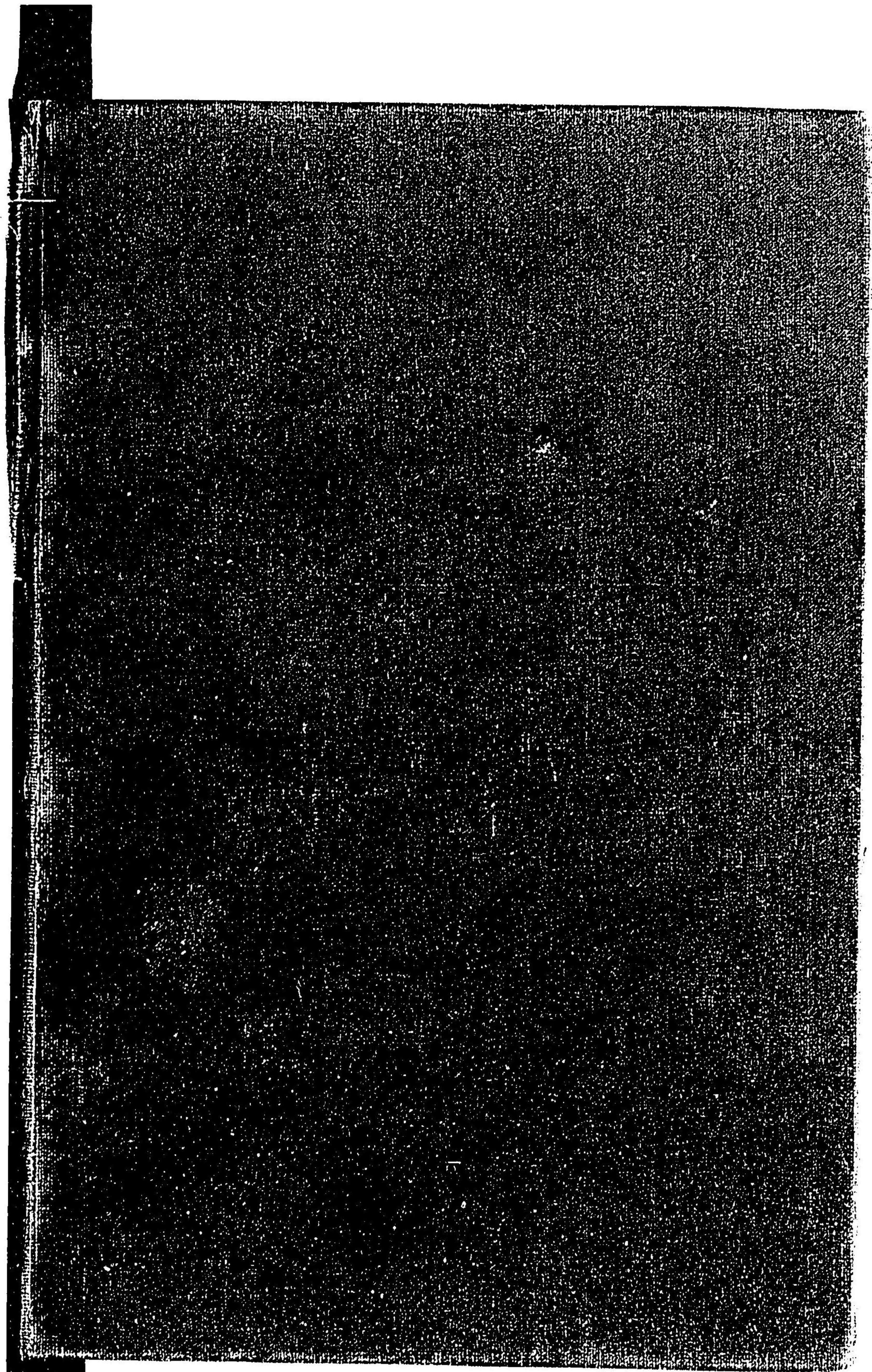
發行所

東京市本郷區本郷四丁目八
電話下谷八百十六番

有朋館

●弊館は博士學士諸先生を始め内外諸大家の著述に係る圖書を出版するを以て專業とす
○弊館出版の圖書は精良正確にして低廉の價格を以て敏速に供給す○弊館は諸大家の
玉稿に對しては十分の敬意を捧げ約束を嚴行す
●弊館は出版業の旁、他店發兌の書籍を販賣し、御愛顧の諸彦に對しては勉めて迅速確實
に御用辦致すべくに付陸續御下命あらんことを冀望す

96
390



96

3901

013762-000-1

96-390

復活の曙光

姉崎 正治 / 著

M37

ABA-0251

